クロスロード

CROSSROADS

JICA海外協力隊
応募者向け
GUIDE

JICA海外協力隊 TimeLine
職種GALLERY
Special Talk
応募までのTo-Doリスト
「選考」早わかり!
健康審査 注意事項
JICAのサポート体制
JICA海外協力隊の「やりがい曲線」
JICA海外協力隊 BEFORE→AFTER
現場CloseUp
JOCV BOOKS

JICA 海外協力隊

Time Line

JICA 海外協力隊の応募から帰国後までの流れをご紹介します。

応募を考えている方々へ

「これといった専門分野がないから、自分はJICA海外協力隊員として役に立つことはできないのでは」と感じている方もいらっしゃるかもしれません。しかし、海外に出れば、思わぬ知識や技術が現地の人のために役立ちます。私は協力隊経験を通じて、「旅行」ではなく、現地で暮らし、現地の人と共に働いたからこそ見えてきたものがたくさんありました。興味がある方は、ぜひチャレンジしてみてください。きっとかけがえのない2年間になるはずです。

全国大会を開催

珠算関連の職種で派遣されているほかの隊員と共に、小学生によるソロバンの全国大会を開催。写真は、大会で良い成績を収めた村山さんの教え子たちと。自分の学校の児童たちが活躍したことで、ソロバン指導に対する意欲を高める現地教員も出てきた。

島国に赴任

協力隊員として赴任したトンガは、約170の島からなる大洋州の国。写真は、首都ヌクアロファがあるトンガタプ島の、ヤシの木が生い茂る典型的なビーチだ。赴任直後には約1カ月間、ここでホームステイ体験を含むトンガ語の「現地語学訓練」を受講した。

村山 茜（むらやま あかね） さん（トンガ・珠算・2017年度2次隊）

1992年生まれ、新潟県出身。専修大学文学部日本語学科を卒業した後、（一社）新潟県十日町市観光協会に入職。退職後、青年海外協力隊（短期派遣）の青少年活動として約2カ月間、ウズベキスタンで活動した後、2017年10月に青年海外協力隊（長期派遣）としてトンガに赴任。首都ヌクアロファにあるトンガ教育訓練省教育課程開発部に配属され、ソロバン教育の充実化支援に取り組んだ。19年10月に帰国し、翌月、（株）にいがた三昧に入社。

ソロバンは初段

ソロバンを習い始めたのは小学2年生のとき。段位は10級から10段まであるが、習い終えた小学6年生では初段を取得。大学時代にソロバン塾のアルバイト講師としてふたたびソロバンに触れ、その経験が協力隊参加の足掛かりとなった。

小学生時代 ／ 高校生時代 ／ 2015年 4月 ／ 2016年 10月 ／ 就職の約1年後 ／ 2017年 7月 ／ 10月 ／ 2018年 2月 ／ 3月 ／ 2019年 任期後半 ／ 10月 ／ 11月 ／ 帰国 ／ 2020年

派遣前

協力隊との出合い

高校生のときに受けた大学の体験授業で魅力を感じ、日本語教師の道を志すように。すると高校の先生から、「日本語教師になれば、青年海外協力隊に参加することも可能になる」と教えられ、その存在に興味を持ち始める。大学は日本語教育を学ぶコースに進学。

観光協会に就職

大学の教育実習として米国や韓国で日本語の授業を行うなか、外国語を使って仕事をする楽しさに目覚める。そうして卒業後は、外国人観光客への対応も必要となる地元・新潟県十日町市の観光協会に就職。写真は、同市の観光の目玉の1つである「雪花火」の様子。雪原を舞台に花火を打ち上げるものだ。

協力隊参加を決意

観光協会で外国語を使った仕事の楽しさを実感し、「海外で働くこと」への憧れが募っていく。それを実現する方法として協力隊の存在を思い出し、情報収集を開始。2016年度の秋募集に応募する。観光協会は退職した。

短期派遣を経験

先に参加できるチャンスがあったことから、派遣期間が2カ月間という短期派遣の協力隊に応募し、ウズベキスタンに赴任。NGOが設ける日本文化の講座でソロバンや日本語などの指導に携わった。現地の人々に溶け込んで活動を進める長期派遣の協力隊員の姿に刺激を受ける。写真は、短期派遣時代の教え子たちと。

派遣中

英語漬けの派遣前訓練

JICA駒ヶ根で受けた2カ月半ほどの派遣前訓練で学んだのは英語。スピーキングが得意だったため、レベルが高いクラスに割り振られた。授業に付いていくのに必死だったが、クラスの仲間と授業以外でも英語で話すなどして、めきめきと英語力がアップ。写真は、派遣前訓練の英語クラスのメンバーやゲストスピーカーと。

ソロバン指導を開始

新年度から活動を開始。トンガでは小学3～5年生の算数授業の最初の15分間にソロバンの練習をすることとなっていた。村山さんは首都の数校を巡回してソロバン指導を支援。写真はその様子。

教員対象の検定を実施

任期の半ばごろから、現地教員たちのソロバン指導への意欲の向上を狙い、日本で使われている問題を使用した「検定試験」の受験を促した。写真は、検定に向けた勉強会に取り組む様子。

帰国後

地元企業に再就職

協力隊参加を通して海外で働く楽しさを実感し、世界のどこにいても働ける技術を身に付けたいと思うように。そうして帰国後は、地元・新潟県にあるホームページ制作会社の（株）にいがた三昧に入社。

【表紙写真】
鈴木広樹（すずき ひろき）さん
（ザンビア・体育・2017年度1次隊）

私は中央州セレンジェ郡のカムワラ小学校で放課後の部活動としてサッカー部を立ち上げ、その指導に携わりました。部員の自主性を引き出すことに重きを置いたところ、次第に彼ら自身で出欠をとったり、練習や試合をマネジメントしたりすることができるようになりました。私（前列の左から3人目）と共に写真に写っているのは、それまで2年間にわたって指導を続けてきた9年生の部員たちです。

【凡例】

JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2019年度3次隊）			
氏名	派遣国	職種	隊次

JICA海外協力隊の種類（呼称）は、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。特に明記されていない場合は「青年海外協力隊」となります。

ロゴタイプデザイン：（株）AND
レイアウト：（株）AND
印刷・製本：弘報印刷（株）

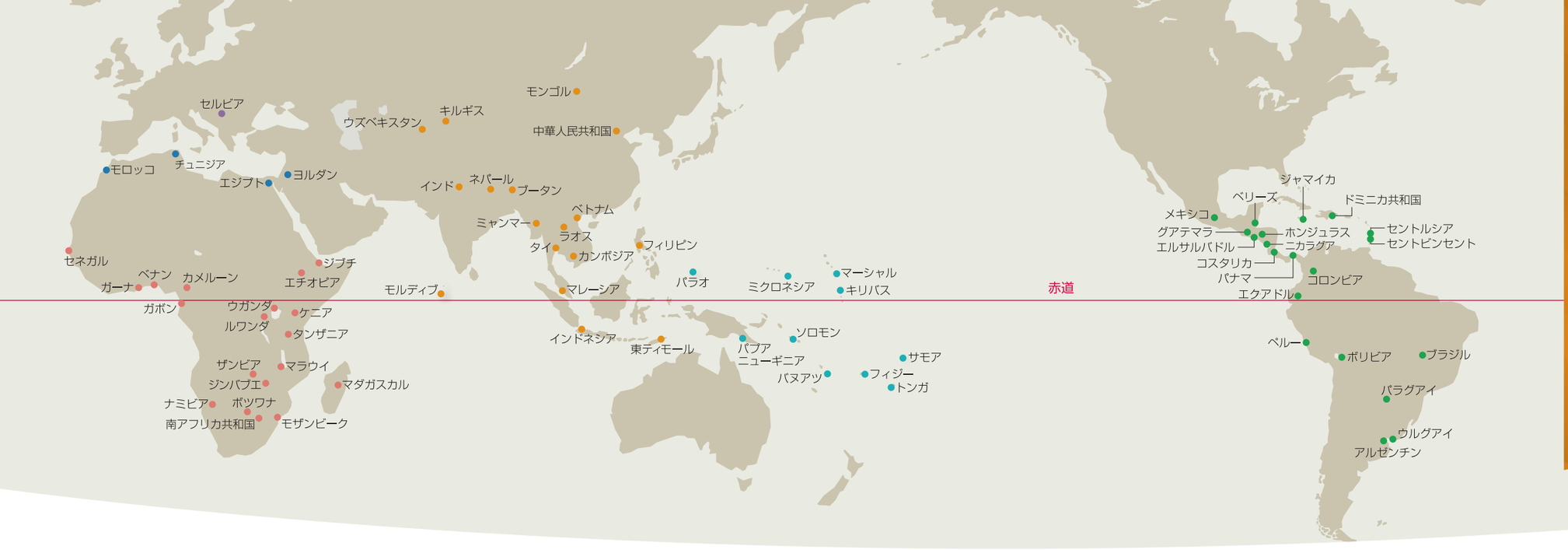
JICA海外協力隊応募者向けGUIDE
クロスロード
Contents

04 JICA海外協力隊派遣現況
06 職種GALLERY
10 Special Talk
16 応募までのTo-Doリスト
17 「選考」早わかり！
18 健康審査 注意事項
19 JICAのサポート体制
20 JICA海外協力隊の「やりがい曲線」
24 JICA海外協力隊 BEFORE→AFTER
30 現場CloseUp
34 JOCV BOOKS

JICA海外協力隊 派遣現況

JICA海外協力隊の派遣者数の現況をまとめました。2020年12月末現在、累計人数は延べ5万4,418人に達し、414人が派遣中です。

※表とグラフの数値は2020年12月末現在の延べ人数
※一般：青年海外協力隊／海外協力隊
　シニア：シニア海外協力隊
　日系一般：日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊
　日系シニア：日系社会シニア海外協力隊
※新型コロナウイルス感染症の影響により、一部の隊員を除いて、日本に一時帰国中。



派遣国別（派遣中）

■ 欧州地域

国名	一般	シニア	合計
セルビア	2		2
合計	2		2

■ 中東地域

国名	一般	シニア	合計
エジプト	1		1
チュニジア	2		2
モロッコ	3		3
ヨルダン	4		4
合計	10		10

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア	合計
ウガンダ	4		4
エチオピア	4		4
ガーナ	14		14
ガボン	1		1
カメルーン	3		3
ケニア	6	1	7
ザンビア	12	1	13
ジブチ	3		3
ジンバブエ	5		5
セネガル	13		13
タンザニア	11	1	12
ナミビア	4		4
ベナン	3		3
ボツワナ	5		5
マダガスカル	5		5
マラウイ	1		1
南アフリカ共和国	1		1
モザンビーク	10		10
ルワンダ	10		10
合計	115	3	118

■ アジア地域

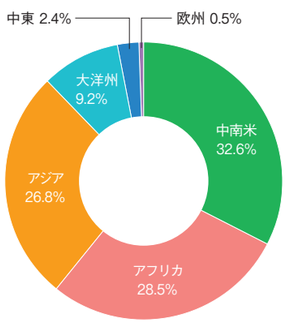
国名	一般	シニア	合計
インド	10		10
インドネシア	2		2
ウズベキスタン	10	1	11
カンボジア	5	1	6
キルギス	5		5
タイ	9		9
中華人民共和国	3		3
ネパール	14	1	15
東ティモール	7		7
フィリピン	5		5
ブータン	3	1	4
ベトナム	7	1	8
マレーシア		3	3
ミャンマー	1		1
モルディブ	4		4
モンゴル	7		7
ラオス	11		11
合計	103	8	111

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア	合計
キリバス	1		1
サモア	3		3
ソロモン	6		6
トンガ	3		3
バヌアツ	7		7
パプアニューギニア	5	1	6
パラオ	3		3
フィジー	4		4
マーシャル	1		1
ミクロネシア	4		4
合計	37	1	38

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア	合計
アルゼンチン	9		2	1	12
エクアドル	7				7
エルサルバドル	5				5
グアテマラ	4				4
コスタリカ	8				8
コロンビア	3				3
ジャマイカ	6	1			7
セントビンセント	2				2
セントルシア	1				1
ドミニカ共和国	14		3		17
パナマ	1				1
パラグアイ	6		2	1	9
ブラジル			25	2	27
ベリーズ	4				4
ペルー	7				7
ボリビア	10				10
ホンジュラス	8				8
メキシコ	1	2			3
合計	87	12	32	4	135



地域別派遣人数の割合

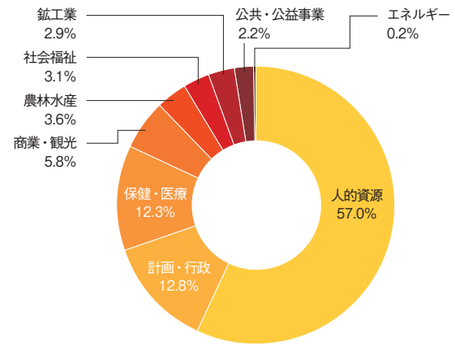
合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	合計
派遣中	354 (169／185)	24 (18／6)	32 (11／21)	4 (1／3)	414 (199／215)
累計	45,776 (24,302／21,474)	6,553 (5,298／1,255)	1,542 (597／945)	547 (252／295)	54,418 (30,449／23,969)

※括弧内は男女の内訳（男性／女性）

分野別（派遣中）

分野名	一般	シニア	日系一般	日系シニア	合計
計画・行政	48	3	2		53
公共・公益事業	8	1			9
農林水産	14	1			15
鉱工業	10	2			12
エネルギー		1			1
商業・観光	18	5		1	24
人的資源	196	7	30	3	236
保健・医療	49	2			51
社会福祉	11	2			13



分野別派遣人数の割合

出身都道府県別（派遣中）

都道府県	一般	シニア	日系一般	日系シニア	合計
北海道	15	1	4		20
青森県	6		1		7
岩手県	3		1		4
宮城県	9	1			10
秋田県	3				3
山形県	6				6
福島県	9	1			10
茨城県	15				15
栃木県	3		1		4
群馬県	5		1	1	7
埼玉県	8	1			9
千葉県	13		1		14
東京都	46	3	1	2	52
神奈川県	20	2		1	23

都道府県	一般	シニア	日系一般	日系シニア	合計
新潟県	3				3
富山県	4				4
石川県	4		1		5
福井県	1				1
山梨県	1				1
長野県	3	1	1		5
岐阜県	4		2		6
静岡県	7	1			8
愛知県	16	1	3		20
三重県	5				5
滋賀県	4				4
京都府	14				14
大阪府	25	3			28
兵庫県	14	1	3		18
奈良県	4				4
和歌山県	3		1		4

都道府県	一般	シニア	日系一般	日系シニア	合計
鳥取県			1		1
島根県	3				3
岡山県	4		1		5
広島県	6	1	2		9
山口県	3				3
徳島県		1			1
香川県	4	1	1		6
愛媛県	7				7
高知県	5	1			6
福岡県	18		4		22
佐賀県	5				5
長崎県	2	1			3
熊本県	5				5
大分県	3	2			5
宮崎県	2		1		3
鹿児島県	4	1			5
沖縄県	10		1		11

職　種
GALLERY

JICA海外協力隊の活動領域は、9分野の190職種に及びます。
ここでは、その一部の職種の活動の様子がわかる写真を集めてみました。

[field]
人的資源

ソロモン

Youth Activities
青少年活動
田中美那さん（2017年度1次隊）
配属先：ノロ町役場（ウエスタン州）

主な活動は地域のスポーツ振興の支援。写真は「運動会の支援を」との依頼を受けた州内の小学校で行った、仲間の背中を1人が渡る「波乗りジョニー」の練習。子どもたちは初体験だったが、大盛り上がりだった。

バヌアツ

Soccer
サッカー
土屋圭悟さん（2016年度1次隊）
配属先：ポートビラ市役所（シェファ州）

主な活動はサッカーの指導と普及。土屋さんは各地で小学生のサッカークラブを立ち上げ、競技人口の増加を図った。写真は、そうしたクラブの練習風景。サンダルしか持たないため、裸足でプレーする子が大半だった。

ペルー

Environmental Education
環境教育
中村俊一さん（2016年度2次隊）
配属先：国家自然保護区管理事務局パラカス事務所（イカ州）

主な活動は自然環境保護に関する啓発。写真は、ペンギンやアシカなどの野生動物が観光の目玉となっている国立海洋公園で、観光客に公園の野生動物を紹介するイベントを行った際の中村さん（左端）と同僚たち。

セントルシア

PC Instructor
PCインストラクター
内田佳秀さん（2016年度4次隊）
配属先：セントルシア・カリキュラム教材開発局（カストリーズ郡）

主な活動は中等学校でのIT授業の実施。写真は、内田さんがプログラミングの指導を行ったIT授業の様子。生徒たちにはプログラミングのベースとなる数学の力が足りなかったことから、その補講も立ち上げた。

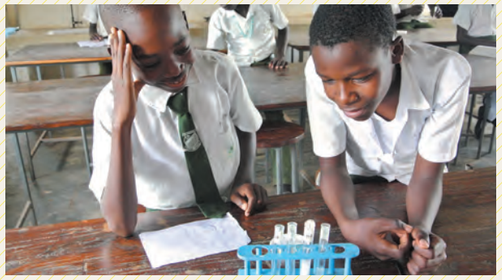
ガボン

Judo
柔道
花田健悟さん（2017年度2次隊）
配属先：ガボン柔道・柔術連盟（エスチュエール州）

主な活動は道場やナショナルチームでの柔道の指導。写真は、通った道場の1つ。当初は外国語でやんちゃな子どもたちを相手にすることに手こずったが、現地の指導者などの助けで活動を軌道に乗せることができた。

ウガンダ

Science Education
理科教育
持永佳代さん（2016年度3次隊）
配属先：セントムガガ中高等学校（ムベンデ県）



主な活動は配属先での理科の授業や課外活動の「サイエンスクラブ」の支援。写真は、サイエンスクラブの様子。触媒となる酵素を持つジャガイモなどを過酸化水素水に入れて分解させ、酸素の発生を観察する実験を行っている。

セルビア

Japanese Language Education
日本語教育
佐藤節子さん（2016年度2次隊）
配属先：ベオグラード語学高等専門学校（ベオグラード市）

主な活動は日本語専攻の生徒たちを対象とする日本語の授業や、月に1回設けられていた日本文化体験の授業の支援。写真は、佐藤さんが行った日本文化体験の授業で浴衣の着付けを体験した生徒たち。

モンゴル

Early Childhood Education
幼児教育
春日井里菜さん（2017年度2次隊）
配属先：オルホン県第9幼稚園（オルホン県）

主な活動は配属先での幼児教育の質向上支援。写真は、自分がつくった紙芝居を発表する園児。春日井さんが紙芝居のつくり方を教えた同僚教員の発案によって導入されるようになった活動だ。

マーシャル

Primary School Education
小学校教育
松藤 輝 さん（2017年度1次隊）
配属先：リタ小学校（マジュロ環礁）

主な活動は配属先での算数授業の質向上支援。写真は、九九を1問ずつ書いたカードを次々に見せ、解かせていく「九九のフラッシュカード」を使ってみせる松藤さん。計算力向上の手段として紹介した指導方法だ。

[field] 保健・医療 社会福祉

マダガスカル

Nursing
看護師
永吉 礼（ながよし あや）さん（2017年度1次隊）
配属先：マジュンガ1郡保健局（ブエニ県）

主な活動は地域保健を末端で担う「保健・栄養ボランティア」の能力強化支援。写真は、村を訪れて保健・栄養ボランティアに体重測定の正確な方法を指導する永吉さん。吊り秤で測定するのが一般的だった。

マラウイ

Nutrition
栄養士
安冨 藍（やすどみ あい）さん（2017年度2次隊）
配属先：カスング県病院（カスング県）

主な活動は配属先の病院や地域での栄養教育。写真は、配属先で待合室にいる患者を相手に栄養教育の講義を行う安冨さん。マラウイ保健省が推奨している「6つの食品群」の概念を解説している。

ヨルダン

Physical Therapy
理学療法士
古宮將太（こみやしょうた）さん（2017年度2次隊）
配属先：マフラックリハビリ訓練センター（マフラック県）

主な活動は知的障害児の通所施設である配属先でのリハビリ支援。任地にはシリア人難民が多く住んでいたことから、身体障害がある難民の家を訪問し、家族にケアの助言をする活動も行った。写真はそのひとコマ。

ブータン

Welfare for Persons with Disabilities
障害児・者支援
益田寛子（ますだ ひろこ）さん（2017年度3次隊）
配属先：ワンセル聾学校（パロ県）

主な活動は配属先での美術の指導。写真は、空き箱とペットボトルのふたで自作したサッカーゲームを楽しむ児童たち。「次の授業はサッカーがやりたい」という児童たちのリクエストをヒントに設定した制作課題だった。

ベナン

Infection and HIV/AIDS Control
感染症・エイズ対策
松岡由真（まつおか ゆま）さん（2017年度1次隊）
配属先：クルエカメ地域保健局（クッフォ県）

主な活動は村や小学校で衛生に関する啓発や授業を行うこと。写真は、小学校で行った手洗いの授業の様子。手洗いの正しい手順をひととおり伝えた後、一部の児童に前に出て実践させ、教えたことの定着を図った。

[field] 計画・行政 農林水産 商業観光

ガーナ

Community Development
コミュニティ開発
髙橋将太（たかはし しょうた）さん（2017年度4次隊）
配属先：ビジネス支援センター（セントラル州）

主な活動は貧困地域の住民の収入向上支援。任地でつくられていたココナツオイルを活用した石鹸を製造・販売するビジネスを立ち上げた。写真は、ココナツ入り石鹸のラッピングを練習する支援対象地域の女性たち。

フィリピン

Aquaculture
養殖
山口 燿（やまぐち よう）さん（2016年度2次隊）
配属先：マヨヤオ町役場農業事務所（イフガオ州）

主な活動は任地の農家が水田で行うドジョウやコイの養殖の支援。写真は、山口さんがドジョウの稚魚（水田に放てるまでに成長した個体）を増やす技術を指導した農家たち。手前は彼ら自身が育てた稚魚だ。

ジャマイカ

Disaster Preparedness and Disaster Response
防災・災害対策
笹森賢一（ささもり けんいち）さん（2016年度2次隊）
配属先：セントアン教区事務所防災課（セントアン教区）

主な活動はコミュニティの災害対応能力の向上を目的とする啓発や教育の支援。写真は、子どもたちが参加するサマーキャンプで授業の枠をもらい、地震発生時の対応方法について指導する笹森さん。

東ティモール

Tourism
観光
星 雅之（ほし まさゆき）さん（2016年度2次隊）
配属先：観光ホスピタリティ学校（ディリ県）

主な活動は職業訓練校である配属先のホテルコースの質向上支援。写真は、ホテルのレセプション業務を学ぶ実習授業の様子。星さんはこの実習で使う「想定問答集」をより実践的なものに改良するなどした。

ホンジュラス

Automobile Maintenance
自動車整備
福地隆光（ふくち たかみつ）さん（2016年度3次隊）
配属先：ドロテオ・バレラ・メヒア技術中高校（ラ・パス県）

主な活動は配属先に設置された自動車整備科の教員への技術指導。写真は、地域の人から持ち込まれた車の整備を行う同僚教員たち。整備の実際の様子を生徒たちに見せることも、彼らへの教育の一環だった。

Special Talk

― 協力隊OB・OG座談会 ―

協力隊に興味を持ってから選考、赴任へと至るまでの間に、どのような準備をすれば良いのか？　協力隊経験を通して得られる成長とは？　参加を考えている方々にとっての関心事について、３人の経験者に語り合っていただきます。

退職参加

面迫一途美（おもさこひとみ）さん
（エクアドル・高齢者介護・2017年度2次隊）

1990年生まれ、広島県出身。大学卒業後、介護スタッフとして高齢者施設に４年間勤務。退職した後、2017年10月に青年海外協力隊員としてエクアドルに赴任。19年10月に帰国。現在は精神科病院に相談員として勤務。

現職参加

益子大輔（ましこだいすけ）さん
（カンボジア・青少年活動・2017年度1次隊）

1988年生まれ、東京都出身。大学卒業後、東京都の公立中学校に英語科教員として６年間勤務した後、2017年７月に青年海外協力隊員としてカンボジアに赴任（現職教員特別参加制度）。19年３月に帰国し、復職。

学卒直行

高橋真子（たかはしまこ）さん
（エチオピア・バドミントン・2017年度1次隊）

1994年生まれ、大阪府出身。大学ではスポーツ法政策を学ぶかたわら、体育会のバドミントン部で選手として活躍。卒業後の2017年７月、青年海外協力隊員としてエチオピアに赴任。19年７月に帰国。現在は英国のブラッドフォード大学大学院で平和学を学んでいる。

応募に至るまでの道のり

編集部　協力隊時代の活動内容を含め、自己紹介をお願いします。

面迫　高齢者施設で介護スタッフとして働いた後に、退職して協力隊に参加しました。派遣国はエクアドルです。配属先はピチンチャ県キト市の福祉事業の実施機関であるキト市慈善財団で、実際の活動場所はホームレスの高齢者を保護する施設です。そこで私は、同僚たちと共に利用者の介助を行いつつ、床ずれや転倒を防止するための技術などに関する勉強会を開催したり、同僚たちの衛生意識を高めるための啓発を行ったりしました。現在は精神科の病院で相談員として働いています。

益子　私は東京都の公立中学校に英語科教員として勤務した後、協力隊に現職参加しました。派遣前の実務経験は６年です。配属先はカンボジアのカンポット州教育青年スポーツ局という、日本の教育委員会にあたる機関です。「中学校の生徒会活動の活性化」というのが私の要請内容で、いくつかの中学校を回りながら、それぞれの生徒会が取り組む運動会の運営や校内の美化推進のサポートをしました。帰国後は派遣時とは違う中学校に英語科教員として復職しました。

高橋　私は大学でスポーツ法政策を学んだ後、新卒で協力隊に参加しました。大学時代までバドミントンの選手だったので、職種はバドミントンを選びました。配属されたのはエチオピアの南部諸民族州ユース・スポーツ事務所という、スポーツの振興などに取り組む行政機関です。６歳から18歳までの約30人が所属するバドミントンのクラブチームで指導することがメインの活動で、ほかにバドミントンを普及したり体育授業の大切さを伝えたりするために小学校を回る活動も行いました。現在は国際協力の道を目指し、英国のブラッドフォード大学大学院で平和学を学んでいます。

編集部　協力隊に興味を持ち始めてから実際に応募されるまで、どのような経緯だったのかをご紹介ください。

面迫　協力隊自体を知ったのは中学生のときでした。通っていた中学校に協力隊経験者の方が来られ、その体験談を聞く機会があったからです。そのときに「海外で暮らすこと」や「ボランティア活動」に関心を持ったものの、それらを実践することはないままでした。大学を卒業した後、高齢者介護施設の職員として社会人の第一歩を踏み出したのですが、そのころはまだ「海外で暮らすこと」や「ボランティア活動」への関心が消えていなかったので、ＪＩＣＡのウェブサイトを見て協力隊の情報を調べてみました。すると、私が応募できそうな「高齢者介護」という職種は３年間ほどの実務経験が求められていることがわかりました。そうしてまずは高齢者介護の実務経験を積み、３年経ったときにまだ協力隊に興味があるようだったら応募することにしました。

高齢者介護施設の入所者がそれまでに送ってきた人生はさまざまで、なかにはかつて海外で働かれていたような方もいらっしゃいます。私がまったく知らない国での刺激に満ちた体験談を伺うなか、私も歳を取ったときにそんな体験談が話せるような豊かな人生を送りたいと思うようになっていきました。そうして社会人経験が３年を過ぎ、やはり協力隊に参加したいという気持ちが消えていなかったので、応募を決意しました。

益子　私が協力隊の存在を知ったのは、派遣のわずか１年半前でした。当時勤務していた学校の校長に、現職教員特別参加制度を紹介しているパンフレットを見せてもらったのがきっかけです。私はその２年前に、英語科教員が米国の大学で半年ほど英語教育について学ぶ文部科学省のプログラムに参加しており、校長は私が海外に興味を持ち、かつ英語科の教員ならなお有益だろうと考えて協力隊のことを教えてくれたのだと思います。私は常々、英語や道徳の教科書に国際的な話が出てくるのに、自分はよく理解していないまま生徒たちに教えていることが気にかかっていました。そのため、協力隊に参加することはパンフレットを見たときにほぼ即決しました。

高橋　協力隊の存在自体は、中学校の社会科の授業や電車の中吊りポスターを通じて知っていたのですが、大学３年生になるまで協力隊経験者に出会ったこともなく、まったく関心がありませんでした。そもそも英語が苦手で海外自体に興味がなく、パスポートを取ったことすらありませんでした。そうしたなか、そろそろ就活シーズンに入るという大学３年生の冬に、受講していた大学の授業に協力隊経験者の方がＪＩＣＡ関西の方と一緒にゲストスピーカーとして参加し、協力隊のことを紹介してくださる機会がありました。当時はバドミントンの練習にばかり力を入れていた時期で、卒業後については漠然と「大学院への進学も良いかな」と思っていた程度で、ほとんど考えていませんでした。そんななかで協力隊経験者の話を伺い、いただいたパンフレットを開いてみたら、「バドミントン」という職種があったわけです。私が所属していたバドミントン部は強豪で、練習も非常にきつかったのですが、それに必死に食らいついてきたのは、こういうところで人の役に立つためだったのだと、運命的な出合いのようなものを感じました。そうして参加を検討したのですが、慣れて居心地の良い「コンフォートゾーン」ではない所に身を置き成長する経験を、社会に出る前にしておきたい、それには協力隊はうってつけだろうと考え、あまり迷わずに応募を決意しました。

参加の「形態」や「タイミング」

編集部　みなさんは「退職参加」「現職参加」「学卒直行」と参加の形態が異なりますが、「ほかの形態のほうが良かったかもしれない」といったことを感じたりはしなかったでしょうか。

面迫　私の派遣前の職場は協力隊への

現職参加が難しかったので、退職して参加するほかありませんでした。そのため、帰国後にちゃんと再就職できるかどうかについて考えたうえで応募したのですが、介護の仕事は専門職であり、私には実務経験もあったので、なんとかなるだろうと腹をくくりました。私は介護の現場で働くなか、より深く精神的なケアにかかわる仕事をしてみたいと考えるようになり、在職中に精神保健福祉士の資格を取得しました。それにより、「ソーシャルワーカー」という職種で協力隊に参加できる可能性も出てきました。しかし、介護の仕事には「支援対象者とより密なかかわりをする」という特性があり、協力隊員として異文化社会の中で介護の活動に取り組めば、自分のコミュニケーションの引き出しが広がるだろうと考えたこと、さらに協力隊活動をそれまで携わってきた仕事の集大成とし、ひと区切り付けたかったことなどから、「高齢者介護」という職種での参加を決意しました。今の仕事は、精神保健福祉士の資格があったから就くことができたものです。

益子　私は協力隊に参加した後に国際協力の仕事に転身するといったことは考えておらず、海外の教育現場を経験し、そこで学んだことを日本での教職に還元できれば良いと思っていました。ですから、帰国後に確実に日本の教職に戻ることができる現職参加はありがたかったと感じています。

高橋　私は先ほどお話ししたとおり、「社会に出る前にコンフォートゾーンから抜け出す経験をしておきたい」という思いが強かったので、帰国後にちゃんと就職できるかどうかについての不安はあまり感じていませんでした。むしろ不安だったのは、協力隊の選考に落ちてしまったときのことです。私は大学4年生になる年の春募集に応募したのですが、当初は就職活動も並行して進めておいたほうが良いのかどうか、迷いました。協力隊の選考に受からなければ、進路が決まらないまま大学を卒業することになってしまうからです。しかし、春募集で合格できなくても、秋募集で合格すれば、大学を卒業した年に協力隊員として赴任できる見込みがあること、おそらく人生最後となるバドミントンの大会が控えていたことなどから、就活と協力隊受験の「二足のわらじ」は捨てることにしました。そうして、何が何でも協力隊の選考に受からなければと、合格するために必要な情報を得るために協力隊の説明会には何度も足を運びました。

編集部　みなさんはそれぞれ違う年代で協力隊に参加されていますが、ご自身が参加したタイミングについてどのように感じていますでしょうか。

面迫　高齢者介護の職種の案件は3年の実務経験が求められていたので、私がもっと前に応募するという選択肢はありませんでした。一方、もっと実務経験を積んでから参加するとなると、人生設計上、勇気が必要となってくると感じていたので、振り返ればちょうどよいタイミングでの参加だったかなと思います。

益子　私はちょうど異動となる年度での協力隊参加だったので、職場にかける負担は最小限となる良いタイミングでした。私のような教育分野の職種の場合、教員免許状を持っていれば新卒でも派遣させてもらえるような案件はあり、カンボジアの教育分野の同期隊員のなかにもそうした人が少なくありませんでした。彼らを見て思ったのは、私よりはるかにバイタリティがあるということです。体当たりで教育行政機関に飛び込んでいき、活動の幅を広げようとする。私は日本で教職を経験していることで、カンボジアの学校を日本の学校と比較し、課題を見出すことができたとは思うのですが、協力隊活動はそうした分析の力だけでは済まないものなので、新卒で参加するのと実務を経験して参加するのとでは、いずれも一長一短だなと感じます。例え私自身が新卒で協力隊に参加していたとしても、その後に日本で教職に就いたならば、確実に仕事にプラスになるものを得ていただろうと思います。

高橋　まだ社会人としての本格的なスタートは切っていないのですが、今の時点で思うのは、新卒で協力隊に参加したのはベストな選択だったということです。益子さんがお話しされたとおり、新卒で参加することと実務経験を積んでから参加することには、それぞれにメリットとデメリットがあると、私も感じています。私の経験では、実務経験がないために仕事に関して「こうすべき」という軸もないので、すでに実務経験を積んでいる現地の人たちとの摩擦が少なかったと感じています。私のような若造が赴任すると、「あなたに何ができる？　なんならわれわれのスキルを教えてあげようか」といったような態度をとられてしまうわけですが、私は実務経験がないから、「ぜひ教えてほしい」と何のストレスもなく受け止めることができました。実務経験がある協力隊員のなかには、そうした対応でストレスを感じる人もいたと思います。

❶配属先の利用者への介助を行う面迫さん
❷配属先の利用者に折り紙を教える面迫さん
❸配属先の施設の前で利用者や同僚たちと

「言葉以外の表現方法への意識が高まった」（面迫さん）

赴任前の準備や持ち物

国際協力の仕事を目指すこと、そのために海外に留学することなどは、派遣前に自分がそうするとは想像もしていなかったことなので、人生の大きな舵取りをしてくれたという意味でも、新卒で協力隊に参加したのは私にとってベストな選択だったのではないかと思います。私のようなスポーツ分野の協力隊員は、プレーヤーとしての技術や体力が残っている間に協力隊に参加するほうが良いと思うので、その点でも、選手を引退した直後に参加したのは正解だったと思います。

編集部　協力隊では派遣前に語学などを学ぶ派遣前訓練を受けますが、選考に合格してから派遣されるまでの間、ほかにどのような準備をするのが良いと感じていますか。

面迫　「高齢者介護」という私の職種で派遣される協力隊員の人数は少なく、同期では私1人でした。そのため、派遣前に同職種の方と情報や意見を交換する機会がほとんどなく、活動について具体的なイメージをつくることができないまま赴任したのですが、そのために当初は手こずってしまったかなと感じています。ですので、派遣前に同職種の先輩隊員にコンタクトし、話を伺っておいても良かったかなと思います。エクアドルは介護施設に常駐する協力隊員の前例が少なかったので、先輩隊員の活動報告書で現地の介護の現場に関する情報を事前に得ることもできませんでした。そのため、どのような支援が本当に必要なのかもわからず、「着任してから考えよう」と割り切

❶益子さんのサポートを受けて生徒会が開催した運動会
❷益子さんのサポートを受け、生徒会が旗振り役となって進められた校内の美化活動
❸教科指導などのサポートをするために益子さんが時折通った任地の児童施設

「派遣前訓練を含めてほかに替え難い経験」（益子さん）

Special Talk

— 協力隊OB・OG座談会 —

って赴任しました。

益子　私の場合は前任者がいたのですが、赴任してから活動を開始するまでの間に、前任者とFacebookを通じてコンタクトをとることができました。そうしてその方の時代の状況について詳しく話を伺ってから活動に入ることができたのですが、それについては一長一短だったと感じています。長所は、活動のだいたいの流れをあらかじめイメージすることができたことです。短所は、活動への姿勢がどうしても縛られてしまったことです。前任者から「強い思いで取り組んだ活動だった」と聞いたものは、引き継がなければという気持ちになってしまうのです。ですから、もし前任者と事前にコンタクトをとるチャンスがある場合であっても、一定の距離を保って話を聞くということを意識したほうが良いのかなと思います。

高橋　私が派遣前に個人的に行った準備は、バドミントンの恩師にお願いし、コーチングを学ばせてもらったことくらいです。それが実際に役立ったかというと、ある程度はという感じでした。エチオピアで指導した子どもたちは裸足になってプレーしていたので、身に付けることができる技術の種類もレベルも日本とは違ったからです。ですので、少なくともスポーツ分野の協力隊員は、派遣国のことをあれこれ考えて準備するよりも、自分の技術を言語化する練習をするのが良いと思います。

派遣前の準備としてもっとも大切だと思うのは、派遣中に心がしんどくなってしまうような状況に立たされたとき、幸せ感を維持できるような方法を考えておくことです。「お気に入りの香水を嗅ぐ」など、何でも構わないと思います。そして、もし現地では売っていないような物が必要ならば、それを手に入れ、赴任の際に持参する。期待していたほど自分が配属先に必要とされていないなど、2年の間にストレスが高まる時期は必ずあるはずなので、セルフマネジメントの手段を持っていることは、活動をまっとうするうえで不可欠だと思いました。

益子　私は、何でも日本の鍋の味になる小さな固形の調味料を日本からたくさん持っていったのですが、それを使った料理を食べることは、おっしゃるようなセルフマネジメントの手段になっていたと思います。もう1つの手段としていたのは、体を動かすことです。着任して最初にやったのも、運動ができる場所の確保でした。派遣前からスポーツジムに行くのが好きだったので、カンボジアにもあったら通いたいと思い、いろいろな人に尋ねたのですが、任地に1つ見つけることができました。倉庫を改造してトレーニング用の機器を置いただけの簡易な施設で、料金は1回50円程度です。ストレスが溜まるとそこに行って筋トレをしたのですが、いつも私のほかには誰も利用していませんでした。また、任地は川沿いの街だったので、川べりの道をランニングすることもありました。

高橋　私もスポーツが好きで、職種上も体力を維持することが重要なので、よく音楽を聴きながらランニングをしました。街中を走ったのですが、気が付くと私の後ろを現地の子どもたちが列になって付いてきている。アジア人が珍しいからなのですが、最初はとてもストレスでしたね。

面迫　私は派遣前に海外に行ったことがなかったので、海外で暮らすことができるのかという不安がありました。そのため、セルフマネジメントという点では特に慎重なほうだったのではないかと思います。例えば、私は派遣前から、何か不安に感じることが出てきたときには、部屋で1人になる時間をつくって心を落ち着かせてきたので、派遣中も意識して1人になる時間を確保するよう努めました。それが私にとっては2年間を元気に過ごす秘訣だったかなと思います。協力隊時代はホームステイで、ホストファミリーは私を家族の輪の中に入れてくれようと気をつかってくださるような方々だったのですが、早い段階から「私には1人になる時間も必要です」とはっきり伝えておきました。もちろん、彼らと一緒に過ごす時間もつくり、大切にする。そうすることで、私が一緒に団欒するのを断っても彼らと気まずくならずに済み、とても良い関係が築けたなと感じています。特にステイ先のお母さんとは、親戚とのトラブルなどの愚痴を聞いたり、逆に私の活動の愚痴を聞いてもらったりする、親子のような付き合いをさせてもらうことができました。

協力隊経験を通じた成長

編集部　今振り返って、協力隊経験がその後の人生にどのように結びついているとお感じになっていますか。

面迫　特に大きかったと感じているのは、福祉の仕事で重要な支援対象者とのコミュニケーションの力が向上したことです。配属先の利用者であるホームレスの高齢者のなかには、失語症であり、かつ読み書きもできないという方も少なくありませんでした。そうした方々も意思はありますから、言葉以外の何らかの方法でそれを伝えようとされます。同僚たちはそれを読み取ることができました。「この人のこの手の動きは、こういうことを伝えようとしている」といったような具合です。また、私はスペイン語が得意ではなかったため、たとえ話すことができる利用者であっても、その方が話していることの意味がわからず、表情からそれを察しなければならないこともありました。そうしたことから、言葉以外の意思の表現をしっかり読み取ろうとする姿勢が身に付き、今の仕事にも生きています。精神疾患がある方のなかには、言葉でうまく意思を伝えられない状態の方もいらっしゃるからです。

益子　私は、日本とカンボジアの学校の違いを知ることができたのが、教員としての一番の収穫だったと感じています。カンボジアでは、家庭の経済的な理由などで学校に通いたくても通えない子がいます。そのため、学校に通える子は学校に通えることのありがたさを感じ、将来の仕事のために学べることなら何でも学ぼうと必死でした。例えば、私が活動した中学校の生徒たちはよく、「英語ができるだけで年収が10倍になる」といった話をしていました。先生たちの意識も同様で、「生徒たちがこういう仕事に就けるようにするには、どういう能力が必要なのか」をよく考えていらっしゃる。なかには、古びたパソコンを援助で手に入れ、「この文書ソフトはきみたちが将来、仕事で使うものだ」と言って生徒たちにその操作方法を教えている先生などもいました。生徒と先生のそうした必死さは、私自身を含め、日本で勤めてきた中学校にはあまりないものでした。例えば、「将来、どのような職業に就きたいか？」という質問をすると、カンボジアの中学生はたいていの子が答えるのですが、日本の中学生はほとんどが「わからない」と答えます。そうした経験から帰国後は、「このスキルはどういうふうな形で生徒たちの将来に生きてくるのか」を考え、折に触れてそれを生徒たちに伝えながら英語の授業をするようになりました。

高橋　私は帰国してからまだ仕事に就いていないので、仕事のなかで協力隊経験での学びを生かすのは今後の話になるのですが、希望どおり国際協力の仕事に就くことができたなら、協力隊経験はそのベースになるのだろうと思います。国際協力の仕事では、現地の人たちと同じような家に住み、同じような物を食べ、現地語で彼らとコミュニケーションをするような機会は多くないのではないかと思います。協力隊でそれを経験し、そのなかで得た現地の人たちへの理解は、本当に彼らのためになる支援のあり方を考えるうえで重要になるのではないかと思います。

編集部　最後に、協力隊への参加に興味を持っている方々に向けたメッセージをお願いします。

面迫　人生は「縁」によって広がっていくものだと思います。選考に合格し、実際に参加することが可能となったら、それは協力隊に縁があったということではないでしょうか。ですので、もし協力隊に参加すべきかどうかで迷っているならば、まずは応募してみるのが良いのかなと思います。

益子　私は派遣前訓練で土木や農業、金融など、教育とは違う分野の人たちと出会えたことも、視野が広がる大きな出来事だったと感じています。海外に行くチャンスは協力隊以外にもありますが、派遣前訓練を含めてほかに替え難い経験なのが協力隊だと思います。多くの方に参加のチャンスをつかんでいただきたいと思います。

高橋　私は派遣前に協力隊の募集説明会に参加した際、体験談をお話しされる協力隊経験者の方々が一様に現地の人との交流や現地の文化の話ばかりするので、「どうして活動の話が少ないのだろう」と感じていました。しかし実際に参加してみると、その理由がわかりました。第2の家族と言えるような深い付き合いを現地の人とさせていただき、さまざまなことを学ばせていただくことが、自分の人生にとっていかに大きいかを実感したからです。もちろん活動も懸命に取り組みますが、そのなかでいかに自分がちっぽけな存在で、赴任時に抱いていた「現地の人のために役に立つのだ」という希望がいかに傲慢なものだったかを感じました。ですので、派遣前にお話を伺った協力隊経験者の方々と同様、私もやはり「第2の家族ができるすばらしい経験ですよ」とお伝えしたいですね。

❶小学校を回ってバドミントンの紹介をする高橋さん
❷高橋さんが指導したクラブチームの選手
❸クラブチームのコーチと練習メニューの検討を行う高橋さん

「自分がいかにちっぽけな存在かを実感した」（高橋さん）

＼ 応募までの ／

To-Do リスト

JICA海外協力隊への応募に至るまでにやらなければならない基本的な事柄を列挙しました。各項目の詳細はJICAのウェブサイトでご確認ください。

応募資格

□ 年齢条件（応募期間最終日の年齢が基準）がクリアできる応募期を確認してください。

□ 以下のいずれかに当てはまる場合は、応募前にJICA海外協力隊募集事務局に連絡してください。

▶日本以外の国の国籍を持つ。

▶日本以外の国の長期滞在資格を持つ。

▶裁判が係属中である。

▶破産手続き中である。

職種・案件

□ 応募する区分を決めてください。

▶長期／短期

▶一般案件／シニア案件

□ 以下に従い、応募する職種／案件を決めます。

▶長期・一般案件…「職種」への応募（複数職種可）

▶長期・シニア案件…「案件」への応募（複数職種可）

▶短期…「案件」への応募（複数職種不可）

家族・職場

□ 選考の合否通知文書は応募者調書の「家族連絡先欄」に記載された住所にご郵送することから、海外在住の場合などは記載住所に住む人に連絡してください。

□ 現職参加を希望する場合は、職場に相談し、派遣に向けた休職などに関する調整を進めてください。要件に合致すれば、「現職参加促進費」の制度も利用できます。

体力

□ 日本と異なる環境で生活することを前提に、健康状態について主治医に相談しておいてください。

□ 指定された期間内に健康診断を受け、応募時に提出する健康診断書（指定様式）を準備してください。

合格後

□ 派遣に必要な予防接種は、選考試験の合格後、ご案内に従って受けていただきます。

語学力

□ 希望する案件の選考指定言語（英語／フランス語／スペイン語など）につき、指定の検定試験を受験しておいてください。例えば英語の場合、「TOEIC®で330点以上のスコアを取得していること」などが選考試験合格の条件となっています。

□ 検定試験の結果を証明するもの（語学力証明書）を入手してください。

技術力

□ 希望する案件で求められている技術・免許を習得・取得しておいてください。

□ 希望する案件で求められている経験（実務経験・教員経験・指導経験・競技経験）を積んでおいてください。

お金

合格後

□ 現地での生活にかかる費用に充ててていただくため、国ごとに定めた金額の海外手当を支給します。住居は、派遣国の政府またはJICAが準備します。

□ 属性や派遣国等の条件により、支給される手当等の内容が異なります。

□ 派遣中の処遇については、派遣前訓練でのオリエンテーションなどで詳しくご案内します。

その他

合格後

□ パスポート（公用旅券）は、原則として選考試験の合格後にJICAが発給手続きを行います。ただし、90日以内の短期派遣の場合は、ご自身のパスポート（一般旅券）での渡航となります。

□「年金」「健康保険」「住民票」「税金」の手続きについては、選考試験の合格後にお住まいの市区町村の役場や年金事務所に照会してください。

情報

□ JICAボランティア事業全般について、JICAのウェブサイトなどで情報を入手し、整理しておいてください。

合格後

□ それぞれの派遣先の情報（治安、交通、医療、生活事情等に関する情報）については、派遣前訓練や着任時のオリエンテーションなどで最新の情報をご提供します。

「選考」早わかり！

★「プレエントリー」ができます。

スマホに対応！

募集期間に先立ち、プレエントリーができます。
登録者には、応募に役立つ情報、協力隊員の活動事例や帰国後の進路、JICA海外協力隊に関するニュースなどを配信しています。

※二次選考（面接）は1職種についてのみ行います。

★「一般案件」への応募では、「希望職種」と「希望案件」をそれぞれ最大 3つまで選択できます（※）。

		第1希望		第2希望		第3希望
[例1] 職種併願の場合	希望職種 ▶	小学校教育	＋	コミュニティ開発	＋	幼児教育
	希望案件 ▶	小学校教育の案件		コミュニティ開発の案件		幼児教育の案件

		第1希望		第2希望		第3希望
[例2] 職種単願の場合	希望職種 ▶	コミュニティ開発	＋	―	＋	―
	希望案件 ▶	コミュニティ開発の案件		コミュニティ開発の案件		コミュニティ開発の案件

★受験者毎に「マイページ」を発行しています。

プレエントリーをされた方に発行する、個人用のウェブページです。
●募集に関するお知らせを、マイページのレターボックスで管理し、配信します。
●応募や選考に必要な書類の提出もマイページから行います。
選考結果の通知もマイページを通じて行います。

★詳しくはこちらまで！

JICA海外協力隊ウェブサイト
https://www.jica.go.jp/volunteer/application/

[選考担当者から]

JICA海外協力隊ウェブサイトを積極的に活用してください！

応募相談で多く受ける質問は、「職種選び」に関するものです。職種選びで迷ったときは、ご自身の経験・技術を振り返り、しっかり整理したうえで、JICA海外協力隊ウェブサイトの「シゴトを探す／職種選びのヒント」のページをチェックしてみてください。また、「現地で自分に何ができるのか、何がしたいのか」を具体的にイメージすることも大切です。

応募にあたってご自身が抱く不安や疑問を解決しておくことも大切ですが、ご家族など周りの方が不安や疑問を持っている場合もあります。そうした方々の理解を得るためには、JICA海外協力隊ウェブサイトの「ご家族の方へ」※のページなどが参考になるでしょう。

派遣先で力を発揮するために何より大切なのは「健康」。応募を決めたら、日頃から健康に留意し、必要な場合は治療したり、医師のアドバイスを受けて生活習慣を見直すなどして、さまざまな国・環境にも対応できる健康状態にしておきましょう！

※

選考で重要な「健康審査」について、注意点をまとめました。詳細はJICAボランティアウェブサイト内の以下のページをご参照ください。

Notice!

健康審査注意事項

JICA海外協力隊員が派遣される国々は、生活環境（気候、ライフラインなど）や文化的背景、医療事情（「タイムリーに医療機関を受診できるかどうか」など）が、日本と大きく異なる場合が少なくありません。そのため、選考でも健康審査は重要なものとなっています。左に挙げた事項に注意しつつ、日頃の健康づくりを心がけてください。

選考時の健康審査に関する注意事項

KEYWORD 1
コロナ禍
コロナ禍により、健康診断を受けるまでに時間を要する可能性があるため、早めの受診を推奨します。

KEYWORD 2
募集期
健康診断書の書式は、その募集期に指示されたものを使用してください。他の医療機関のものや、合格後の健康診断書の書式は使用できません。

KEYWORD 3
検査漏れ
医療機関から受け取った健康診断書は開封し、検査漏れなどがないかを必ずご自身で確認し、漏れがある場合は速やかに医療機関にてご相談ください。未記入の項目があると、審査対象外となってしまいます。

KEYWORD 4
血液型
ご提出いただく健康診断書には血液型の記載が必要ですのでご留意ください。

KEYWORD 5
BMI
極度の肥満は生活習慣病の原因となりますが、極度のやせも、抵抗力が弱いために病気にかかりやすかったり、病気になった場合に治療期間が長引いたりする可能性があります。ご自身の体格指数である「BMI」の値を見て留意してください。

※BMI基準範囲=18.5～24.9 kg／㎡　（公益社団法人 日本人間ドッグ学会ホームページより）

KEYWORD 6
LDL
コレステロールには、HDL（善玉）とLDL（悪玉）があります。後者は動脈硬化を引き起こすおそれがあるため、その値が高すぎないか、注意が必要です。

※LDL基準範囲=60～119 mg／dL　（公益社団法人 日本人間ドッグ学会ホームページより）

健康診断の流れ

［選考時］
一次選考と二次選考において、応募時に提出された「問診票」と「健康診断書」をもとに応募者の健康状態を審査します。

［選考合格後］
選考に合格された方には、あらためて健康診断を受けていただきます。その結果により、派遣が取り消しとなる場合があります。また、派遣国によっては、追加で所定の検査が必要となる場合があります。

JICAのサポート体制

JICA では、派遣前・派遣中・帰国後の各段階で、
JICA 海外協力隊員への支援を行っています。
ここではその主なものをご紹介します。

詳細はこちらをご覧ください。

		語学面	技術面	健康・安全・生活面
派遣前	選考合格〜派遣前訓練	**【語学事前学習】** オンラインで学べる語学教材（e ラーニング）などを用意。 	**【講座事前学習】** JICA 海外協力隊員として活動を行うために必要な一般的知識をオンラインで学べるよう、教材を用意。 **【派遣前課題別支援】** 各活動分野に特化したオンデマンド型講座の提供や、オンラインセミナーの実施。	**【予防接種・健康診断】** 赴任にあたって必要な派遣前健康診断や必要な予防接種を案内・実施。
	派遣前訓練	**【語学講座】** 現地で活動と生活をスムーズに始めるために必要な語学力を身に付けるための講座を実施。	**【各種講座】** JICA 海外協力隊の基礎、活動管理手法など、現地での活動と生活に必要なさまざまな講座を実施。	**【安全・健康管理講座】** 現地での活動と生活に必要な、健康と安全に関する管理意識を養うための講座を実施。
派遣中		**【現地語学訓練】** 派遣国に赴任してから配属先に着任するまでの間に、派遣前訓練で学んだ言語や現地語を学ぶ。より実践的な力を養う目的で、1 カ月程度の訓練を実施。 	**【技術顧問】** JICA 青年海外協力隊事務局では、各職種・分野に、その職種・分野の技術に精通する人を「技術顧問」や「技術専門委員」として配置。派遣中の協力隊員が技術面の困難に直面した際に技術的な支援を行っている。 **【『クロスロード』】** JICA 青年海外協力隊事務局では、現地での活動と生活の参考となる実践的な情報などをまとめた冊子『クロスロード』を毎月発行。 	**【在外健康管理員】** 健康に関する相談、病気や医療に関する情報の提供、傷病発生時の対応などを、現地の医療機関や医師と連携しながら行うスタッフとして、現地に看護師免許取得者を配置。 **【安全対策の情報提供】** 現地の治安状況、犯罪防止や交通安全対策に資する情報を提供するほか、通信連絡手段の確保、必要に応じて住居の防犯対策強化なども実施。 **【生活費等】** 赴帰任にかかる旅費や現地での生活費を支給。住居は派遣国の政府または JICA が用意。

帰国後	**【進路開拓支援】** 帰国後 1 年以内の人を対象に、帰国後研修やキャリアセミナー、勉強会などを通じて進路開拓や協力隊経験の社会還元に関するサポートを実施しています。また、「進路相談カウンセラー」や「青年海外協力隊相談役」を全国に配置し、進路相談などのカウンセリングも行っています。
	【キャリア支援】 協力隊経験者の採用に関心がある地方自治体や企業と、協力隊経験者との交流会の実施や、協力隊経験者を対象とする JICA のキャリア情報サイト「PARTNER」にて求人情報の提供などを行っています。また、協力隊経験者の教員・自治体の特別採用枠や JOCV 枠 UNV 制度も設けています。
	【進学・研修支援】 大学・大学院の特別入試制度や、国際協力人材を目指す人向けの研修制度などがあります。また、進路開拓に役立つ技術の習得、免許・資格の取得につながる学習に対して必要な経費を支援する「教育訓練手当」という制度があります。

JICA海外協力隊の「やりがい曲線」

～苦あれば楽ありの2年間～

病院の助産業務を手伝いながら、その質の向上に向けた支援を実施

外国語を使い、日本と異なる文化の中で進める活動では、悩むこともあれば、現地の人の優しさに涙することもあります。JICA海外協力隊員たちの「やりがい」が派遣中、どのように浮き沈みするのか、2人の事例を紹介します。

配属先で生まれたばかりの赤ちゃんの様子を確認する大竹さん

青年海外協力隊 ▶▶▶ 助産師

大竹恵実（おおたけ えみ）さん
（ラオス・2017年度1次隊）

プロフィール

1985年生まれ、栃木県出身。看護師として3年間働いた後、国際医療福祉大学大学院の修士課程に進学し、助産学を学ぶ。修了後、助産師として大学病院に5年間勤務した後、2017年6月、青年海外協力隊員としてラオスに赴任。19年6月に帰国。現在、奄美大島の病院に助産師として勤務。

活動概要

【配 属 先】
パークグム郡病院（ビエンチャン特別市）
【主な活動】
●配属先での助産業務の支援
●村落部での妊婦健診や健康教育の支援
●母子手帳の普及

日本で助産師として働いていた時代に、カンボジアで1週間の医療ボランティアを経験。日本とは大きく違う医療事情に衝撃を受けたことで参加した協力隊では、母子保健業務の支援に取り組んだ。

大竹さんの任地は、人口約5万人のパークグム郡。配属先は、同郡にある二次医療施設の郡病院（以下、「郡病院」）だ。病床数30床の総合病院である。大竹さんが配属された部署は母子保健部門。院内での分娩や妊婦健診などへの対応のほか、郡内の各所にある一次医療施設での健康教育なども担当していた。大竹さんに求められていた役割は、助産業務の支援や、同僚の助産師への技術指導など。着任当時、同部門には3人の助産師が配置されており、そのうちの1人が主に活動を共にする「カウンターパート（以下、CP）」となった。

「責任感のなさ」を嘆く

大竹さんは現地の助産業務の流れを把握するため、一助産師として同僚たちと共に働くことから活動をスタートさせた。そこで見えてきたのは、同僚たちの「仕事」に対する考え方が日本の医療従事者とは異なることだ。仕事よりもプライベートを優先し、そのために欠勤することも少なくなかった。そうしたなかで大竹さんが精力的に仕事に取り組むと、同僚たちは大竹さんを頼り、仕事に割く時間をますます減らすようになってしまった。大竹さんは、「『命』を預かることへの責任感が薄い」と同僚たちの姿勢を嘆き、「私は何のためにここに来たのだろうか」と悩む日が続いた。

自分の存在意義を高めようと大竹さんが積極的に取り組んだのは、新生児蘇生法（新生児を対象とする心肺蘇生法）の技術を同僚たちに伝えることだ。ラオスの新生児死亡率は日本の約30倍。同僚たちには新生児蘇生法に関する知識や実践が少なかった。そこで大竹さんは、新生児の人形を使って同僚たちと練習を行ったり、実際に蘇生が行われる場面でアドバイスしたりするようにした。そうして新生児蘇生法の指導を自分の「守備範囲」とすることができたが、一方でこの活動には葛藤もあった。着任して3カ月ほどたったころ、蘇生が必要な新生児の家族から「やらないでほしい」とお願いされた。後遺症が残って生き残ったら、医療費がかかってしまう――、そんな理由だった。その子は結局、三次医療施設へと搬送されたが、このとき以来、「ラオスで新生児蘇生法を施すことの是非」は、明確な答えが見つからない問いとして、大竹さんの頭に残り続けている。

CPとの関係が深化

転機が訪れたのは、着任して1年あまり経ったころだ。あるとき、「郡病院」で生まれた赤ちゃんがほどなく村の自宅で亡くなってしまった。それを知ったCPが大竹さんに、「もっと早く気づくことはできなかったのだろうか」と悔しい気持ちを打ち明けてくれた。同僚たちについて、「『命』を預かることへの責任感が薄い」とばかり思っていたが、そうではなかったのだと、ようやく知ることができた。そうして大竹さんは、活動への意欲をにわかに取り戻すことができたのだった。

CPとの関係がいっそう深まったのは、その半年ほど後だ。母子手帳の普及をテーマにした隣国タイでの国際会議にラオスの保健・医療分野の隊員やCPと共に参加し、「郡病院」の取り組みを発表。それに向け、郡内各地を回って母子手帳の活用状況を調査するなどの準備を二人三脚で進めたところ、絆が深まったのだ。さらに、この調査によって、村落部で住民を対象に母子保健の教育を行うことの必要性が明らかになった。そうして以後は、CPと共に村落部に赴き、女性たちを対象に母子手帳の活用を含む健康教育を行う活動に力を入れることができたのだった。

❶配属先に来た妊婦の子どもに赤ちゃんについて教える大竹さん
❷村での妊婦健診に参加する大竹さん
❸同僚やほかの助産師隊員と村で健康教育をする大竹さん（奥左）
❹母子手帳の国際会議の会場でCP（右から2人目）と発表の準備をする大竹さん（中央）

JICA海外協力隊の「やりがい曲線」

人物相関図

大竹さん

配属先

ソムスックさん
カウンターパートの助産師
着任当初から味方になってくれた。大竹さんの拙いラオス語も理解してくれる、頭の切れる良き理解者であり協力者。いつも前向きで行動力があり、活動の実現にいつも尽力してくれた。

サムニアンさん
同僚の助産師
共に働き、現場のことをいろいろと教えてくれた。プライベートでは、滝遊びや魚釣りに連れて行ってくれた。出勤したくないと思った時期も、彼女の笑顔や優しさに支えられた。

現地の日本人

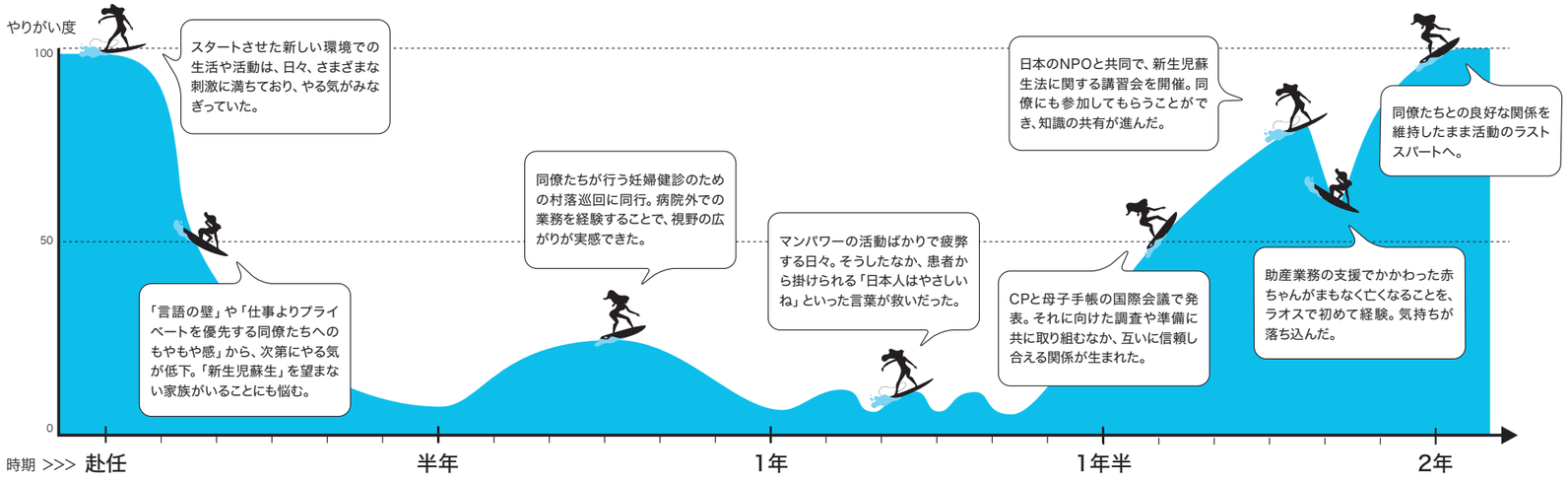
同期の医療系隊員
離れた場所で活動する彼女たちとは、抱える困難や実現したいことが共通することも多かった。そんな彼女たちと協力し合うことで、活動が何倍にも広がった。

三浦さん
JICAラオス事務所の企画調査員（ボランティア事業）
いつも温かく、ときに厳しく伴走してくれた頼れる姉御。活動がうまくいったときに一緒に喜んでくれたのが何よりうれしかった。

小原さん
JICA専門家（ラオス保健省の保健政策アドバイザー）
「何も貢献できていない」と悩む私に、「現場に張り付いて活動する協力隊員の強み」などを教えてくれた。母子手帳の国際会議では、データのまとめ方の指導をしてくれた。

隣人

チョーイさん
商店のお姉さん
ラオス語ができず落ち込んでいたときに、「互いの言語を教え合えば良いのよ」と励ましてくれた。休日には、稲刈りに誘ってくれたり、ラオス料理を教えてくれたりもした。



現状視察をもとに、着目した問題点や改善の方向性について企業のオーナーと議論する延命さん（左端）

シニア海外協力隊 ▶▶▶ 経営管理

延命史雄（えんめいふみお）さん

（アルゼンチン・2017年度2次隊）

プロフィール

1956年生まれ、群馬県出身。青山学院大学理工学部卒。電機メーカーで大型コンピュータの開発・設計を担当した後、米国の現地法人でエンジニア・マネジメントに約10年間従事。帰国し、新規事業の企画を担当した後に定年退職。2017年9月、シニア海外協力隊員としてアルゼンチンに赴任。19年9月に帰国。

活動概要

【配 属 先】
国立工業技術院の地方センターの1つであるフォルモサセンター（フォルモサ州）

【主な活動】
●経営管理の指導に関する同僚への技術指導
●経営管理に関する中小企業への指導

中小企業を支援する公的機関に配属され、同僚たちに「経営管理の指導」の技術を伝達

電機メーカーの米国法人でエンジニアのマネジメントを担当した経験を持つ延命さん。第二の人生として選んだのは、シニア海外協力隊員として「経営管理」の技術を伝授することだった。

延命さんの配属先は、工業分野の試験分析や度量衡検査を主な事業とする国立工業技術院がフォルモサ州に置く地方センター（以下、「センター」）。「センター」を含む同院のいくつかの地方センターでは、中小企業を対象に経営管理に関する支援も行っていた。経営管理とは、生産性の向上に向けて「ヒト」「モノ」「カネ」といったリソースをより有意義に活用する方法を考え、実践する取り組み。延命さんに求められていたのは、中小企業に経営管理の指導をするために必要な技術を同僚たちに提供することだった。延命さんの着任時に「センター」で働いていた同僚は、所長のほか、「電気」や「機械」など専門性がさまざまなエンジニアが11人。彼らはそれぞれの専門性について一流の知識を持っていたが、当時、専門性をまたぐ技術である経営管理関連の知識は勉強していたものの、実践経験に乏しい面があった。

同僚たちとの企業訪問

延命さんが手始めに取り組んだのは、同僚と共に中小企業を回り、経営管理に関する実態をあらためて確認することだ。「センター」が支援の対象としていた企業は、各種メーカーを中心とする20社。巡回するなかでわかったのは、「5S」*など経営管理に関する改善活動の指導を受けた痕跡はあるものの、それが一時的な取り組みに終わってしまっているケースが大半であることだった。そうして得た現場の状況を踏まえ、延命さんが同僚たちへの働きかけとして最初に実践したのは、経営管理に関して改善すべきポイントを見極める方法を同僚たちに伝えるミーティングを、月に1度のペースで定期的に開くことだ。延命さんはこのミーティングで、企業訪問をした際に撮影した工場内の写真を見せながら、効率性を阻む要素がどこにあり、それをどのように改善すべきかについて、日本の企業の事例も紹介しながら同僚たちに伝えた。すると、アルゼンチンの人々は仕事について対価を重視しており、日本の企業のように、プラスアルファの対価が補償されていなくても社員が職場全体の改善に自発的に取り組むことは期待できないことを、同僚たちから教えられた。人々が求める価値や社会課題が異なる中で、「日本式のやり方」をそのまま移植することはできない――。延命さんは、「現地に合った経営管理のあり方を見出さなければならない」という、自身の活動の根本的な課題を突き付けられた。

現地に合った改善方法

「現地に合った経営管理のあり方」を見極めるうえで足掛かりとなったのは、パンの製造企業（以下、A社）での指導例だ。「センター」の指導により、在庫管理と生産ラインを効率的なものに改善することはできていたが、「社員が定刻に出勤せず、製造するパンの量が安定しない」という問題を抱え続けていた。その背景にあった事情の1つは、「トップダウンですべての物事が進められる」という、現地にあった職業文化である。A社の工場では、オーナーと社員の仲介役として現場監督が配置されていたが、社員に指示を出したり、社員を評価したりすることは、すべてオーナーが行っていた。すると当然、社員は現場監督の指示は聞き流し、オーナーの顔色ばかりをうかがう。そこで延命さんは、同社の改善方法について同僚たちと議論し、以下の事柄をオーナーに提案した。

❶社員に指示する権限と社員を評価する権限を現場監督に与える。
❷優良社員を表彰する制度を設ける。
❸社員にも職場改善の提案をしてもらい、それに対する評価も行う。
❹社員のマルチタスク化を行い、人員が欠けた場合に備えておく。

この提案をした後、❹については、労働組合からの圧力や転籍する社員が増えるおそれがあるという理由から棚上げとなったが、❶～❸は継続して実践されるようになった。それにより、延命さん自身が現地の企業に合った経営管理の改善策の方向性を見出すことができただけでなく、同僚たちにもそれが見え、続く成功事例を出すための提案のアイデアを、前述のミーティングの場で真剣に議論するようになったのだった。

❶「センター」の支援対象だった社員約50人の椅子メーカー
❷「センター」の支援対象だった社員約180人の食品パッケージメーカーで、製造用機械の説明を受ける延命さん（左端）
❸同僚たちと延命さん（前列中央）
❹「センター」の支援対象だった社員約200人の自動車部品メーカー。工具類の整備、整理を継続的に実施することの重要性などを指導した

＊5S…「整理」「整頓」「清潔」「清掃」「しつけ」を段階的に徹底させることで、職場の生産性向上を図る手法。

JICA海外協力隊の「やりがい曲線」

人物相関図

延命さん

配属先

マリオさん
配属先のトップ
北東部4州のセンターのボス。セキュリティー関係の副業をしている。サッカー好き。JICAのプログラムで日本に行き、研修を受けた経験がある。

ホルヘさん
理学博士
数値解析のスペシャリスト。米国の大学で物理学の博士号を取得。海外で生活した経験があるため、海外との比較例などを理解してくれた。配属先内で唯一英語が話せたため、支援先との会話でお世話になった。

パブロさん
最年少の職員
職場唯一の独身者。経営管理の手法を習得中。副業をしていないので、常に職場に在籍しており、さまざまな局面で支援をしてもらった。

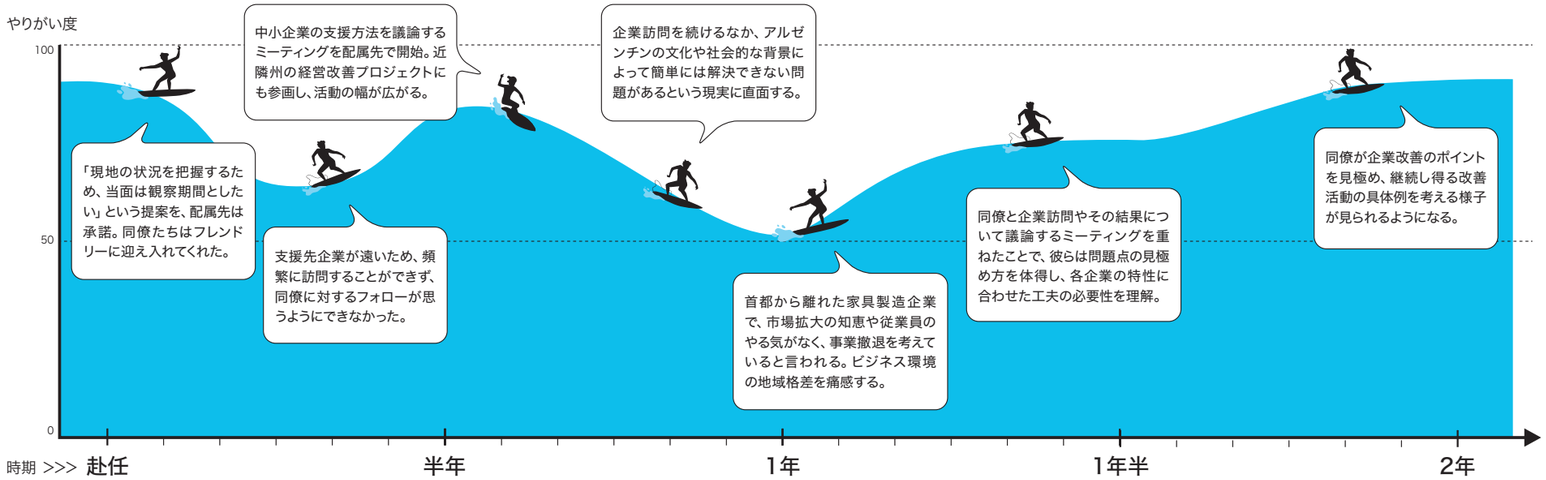
リカルドさん
職員
食品関係のスペシャリスト。日本人には人一倍の好意を抱いている。子どもの教育にも熱心で、家族ぐるみでの付き合いをしてもらった。

アマチュア無線クラブ

マルセロさん
趣味があう友人
アマチュア無線愛好家の「フォルモサクラブ」のメンバー。職場以外での現地の人とのつながりを広げてくれた。首都ブエノスアイレスの出身。

現地の日本人

ロサ田中さん
任地で唯一の日本人（戦後移民）
アルゼンチンの社会について、自身の経験を交えながら教えてくれた人。時折、手づくりのお饅頭など日本食を振る舞ってくれた。



JICA海外協力隊

BEFORE AFTER

日本とは文化が大きく異なる社会に入り込み、現地の人たちと共に暮らし働く経験は、おのずと「人間としての力」を鍛えてくれる。協力隊経験がその後の人生にどのような影響を及ぼすのか、実際の例をご紹介します。

CASE 01

中村栄太（なかむらえいた）さん
（ネパール・野菜栽培・2015年度4次隊）

1985生まれ。山形県出身。日本大学生物資源科学部で農業経済学を学んだ後、2008年4月に種苗会社に入社。主に農薬の営業に携わる。退職後の2016年3月、青年海外協力隊員としてネパールに赴任。カブレパランチョーク郡の農業開発事務所に配属され、農薬の適切な使い方に関する指導などに取り組む。18年3月に帰国。福島県田村市の復興支援員として働いた後、19年4月にカルビーポテト株式会社に入社。

BEFORE 種苗会社の営業職

AFTER 馬鈴薯を扱う会社の調達担当
（カルビーポテト株式会社）

馬鈴薯の契約生産者への栽培支援に従事

種苗会社での営業職を経て協力隊に参加した中村さん。帰国後はふたたび農業関連の企業に就職し、協力隊時代と同様、農作物の生産者を対象に栽培の支援をする業務に携わっている。

農薬に関する技術指導に従事

農業への興味から、大学では遺伝子組換え農作物の流通について研究した。卒業後に進んだのも農業分野の道。種苗会社に就職し、主に農薬の営業に携わった。

社会に出て5年ほど経つと、「自分の生き方を見つめ直すきっかけがほしい」と思うようになった。そのきっかけとして検討するようになったのが協力隊だった。海外で暮らせば、世界の見え方が変わるかもしれない。そうしたチャレンジができるのは、しがらみが少ない若いうちだけだろう。そう考えて勤め先を退職し、協力隊員としてネパールに赴任。2016年3月のことだ。

配属されたのは、農業技術の普及などを行う行政機関。当初、配属先から求められていた活動は、生ゴミなどからつくる有機の「コンポスト肥料」を普及させることだった。ところが、現地の農家を回ってみると、牛や山羊などの家畜を飼う「複合農業」を営むケースが大半であり、彼らは家畜の糞を農作物の肥料として活用。そのため、あえて新たな有機肥料を導入する必要性は薄かった。それを配属先に伝えると、「それならば、どのような活動をしても構わない」と告げられた。そこで中村さんが取り組むことにしたのは、前職で豊富な知識を蓄えていた「農薬」に関する農家への技術指導だ。当時同国では、人体に害がある農薬が農作物に残留していることが問題となっていた。そうしたなか、「まだ害虫が出ていないのに農薬を使う」といった農薬の不適切な使い方をやめるよう促しつつ、希釈した農薬を育苗期に施してその残留を抑えつつ、薬剤の効果を高める「灌注処理」や、どの農家でも出るかまどの煙からつくれ、人体への害がない有機農薬の「木酢液」のつくり方などを指導した。

新たな分野に挑戦

帰国は18年3月。帰国後の就職活動で農業分野の会社からいくつか声をかけてもらえたが、いずれも見送った。「日本社会で出直すことになったからには、思い切ってほかの分野の仕事にも挑戦してみたい」という気持ちが芽生えていたからである。

そうして帰国後の最初のステップに選んだのは、知人に紹介されて就いた福島県田村市の復興支援員だ。復興支援員とは、東日本大震災の被災地の地方公共団体が総務省の財政支援を受けて設置する、コミュニティの再興に向けた業務に取り組む期限付きのポストである。同市は東京オリンピック・パラリンピックに関してネパールのホストタウンとなっており、それに関連する事業に携わることが期待されての採用だった。中村さんが実際に携わったのは、同市とネパールとの間の交流事業や、国際化への市民の理解を広げる事業など。

中村さんはそうした地域づくりの仕事に取り組むなか、海外を経験したことにより、日本社会の課題に以前より意識が向くようになっているのを実感した。なかでも気になったのは、学校に行くことができない子どもなど、社会の中での生きづらさを抱えている人が増加しているという課題だ。生きづらさを抱えた人たちを支援する仕事をしたいとまで考えた。しかし、そうした仕事に従事する覚悟ができず、断念した。

相手のニーズを探る姿勢

そうして、ふたたび農業分野の仕事に戻ったのは、帰国して約1年経った19年4月。就職先として選んだのは、ポテトチップスの原料となる馬鈴薯の調達を行うカルビーポテト株式会社だ。ポテトチップスはきわめてポピュラーなお菓子であり、自分の仕事がそのような商品につながるのであれば、やりがいも感じやすいだろう――、そんな考えが、就職を決断する決め手となった。入社してからの1年間は北海道の支所に配属され、その後は現在に至るまで、宇都宮支所の配属となっている。

入社以来就いているのは、社内で「フィールドマン」と名付けられているポストだ。馬鈴薯の調達先や契約生産者の窓口役として、品質改善や収量アップに向けた指導を行うことが主な役目である。調達先は農産物を取り扱う商系*の業者や農協などで、中村さんが担当している契約生産者は約250軒だ。

ネパールと日本で農家への技術指導に携わったことで、両者の違いも見えてきた。日本の農家の方が、新しい栽培方法を取り入れることにより慎重であるという点だ。ネパールの農家は、電力の供給が不安定で電動の灌漑設備は満足に使えず、手に入る道具も限られているという不便な環境のなか、品質や収量はなかば運に任せざるを得ない。そのため、中村さんが指導した灌注処理など、新しい栽培方法を取り入れることによるリスクはさほど気にしなかった。一方、日本の農家は厳格に栽培を管理しており、新しい栽培方法を取り入れることによるリスクに敏感だ。

有益だと思われる新たな栽培方法の導入を日本の農家に受け入れてもらうためには、「この人の言うことならば、信用しても良いだろう」と思ってもらうことが不可欠である。そこで中村さんは、契約生産者がつくる馬鈴薯以外の作物のことについても相談に乗るなどして、彼らの信用を獲得することに努めている。そうした姿勢は、ネパールの農家がどのようなニーズを抱えているかを絶えず探りながら進めた協力隊活動を通して身に付けたものだ。

「しばらくは、協力隊経験を糧に今の仕事に全力を注ぐつもりです。そうして馬鈴薯についての十分な知識と経験を得て心に余裕が出てきたら、生きづらさを抱えている人をボランティアで支援するなど、人生の幅を広げていければと考えています」

＊商系…全国農業協同組合連合会を通さない農業分野の流通。

JICA海外協力隊 BEFORE AFTER

JOCV

現地の農家に灌注処理の指導をする中村さん

AFTER

契約生産者の畑で馬鈴薯の圃場調査を行う中村さん

CASE 02

森 美緒（もり みお）さん
（ベリーズ・音楽・2015年度1次隊）

1982年生まれ、京都府出身。同志社女子大学学芸学部音楽学科で日本音楽（琴）を研究。日本料理の料亭に勤務した後、2006年4月、京都府立綾部高等学校に音楽科教員として着任。14年4月に同府立南丹高等学校へ異動。15年6月、青年海外協力隊員としてベリーズに赴任（現職参加）。トレド・コミュニティ実業高等学校（トレド郡）に配属され、音楽の授業の実施や同僚教員への技術指導に取り組む。17年3月に帰国し、南丹高等学校に復職。

BEFORE **高等学校の音楽科教員**
（京都府立南丹高等学校）

AFTER **同上（現職参加）**

「総合的な探究の時間」の授業運営を兼任

高校に音楽科教員としての籍を残したまま協力隊に参加した森さん。音楽授業の質向上に向けた支援に取り組むなかで得た学びは、教員としての幅の広がりにつながったと実感している。

「楽譜の読み方」の指導を徹底

「大学は職業訓練機関ではない。その先の仕事のことは考えず、本当に学びたいことを学ぶべきだ」。両親のそんな声に後押しされ、大学の研究対象に選んだのは「琴」。4歳からピアノを習い続け、さらに両親が和楽器の演奏を趣味としていたことなどから思い当たった「本当に学びたいこと」だった。

大学で中学校と高校の音楽科教員の免許状を取ったが、教員になるつもりはなかった。卒業後に就職したのは、外国の要人も多く訪れる日本料理の料亭。大学で和楽器について学ぶなか、日本の文化のすばらしさを実感するようになり、それを世界にアピールすることができるような仕事に就きたいとの思いから選んだ就職先だった。職種は給仕。外国人の客と触れ合うのは楽しかったが、やがて「自分の技術を発揮できるような仕事がしたい」という欲が出てきた。そうして大学卒業の2年後に転身。京都の府立高校に音楽科教員として着任した。

協力隊に参加したのは、教員生活が10年目に入った年。「音楽は国籍や民族を超えて人々がつながり合うことのできるツールです」。音楽の授業で生徒たちにそんな話をしているからには、自分自身が経験してみるべきだと考え、目が向いたのが協力隊だった。

派遣されたのは、日本の中学1年生から高校1年生までにあたる生徒が通う実業学校。同僚教員と共に音楽の授業を行いつつ、彼女たちへの技術指導にも取り組んだ。同僚教員たちは音楽の専門教育を受けていないため、森さんのように「さまざまな表現方法で歌ってみせ、生徒たちの表現力を高める」といったことは難しかった。そこで森さんは、音楽に興味を持った生徒が独学で勉強を進めることができるよう、「楽譜の読み方」をしっかり教える授業にしようと同僚教員たちに提案。その指導ならば彼女たちもこなすことが可能だった。

「音楽」への認識が深化

帰国は17年3月。現職参加であったため、すぐさま元の職場だった京都府立南丹高等学校に復職した。「音楽は国籍や民族を超えて人々がつながり合うことのできるツールです」。復職後はこの言葉を、ベリーズでの体験を交えながら自信を持って伝えることができるようになっていた。例えば、同国に赴任して最初に入った音楽授業のエピソード。まだ英語が不慣れなのに、一緒に入るはずだった同僚教員が教室に現れず、生徒たちが騒ぎ出して収拾がつかなくなってしまった。そこで森さんは意を決し、英語のバラードを歌い始める。すると生徒たちは静まり返り、耳を傾けてきた。そして歌が終わると、「音楽の先生なのですね！」「感動しました！」などと口々に称賛。一気に距離が縮まったのだった。

英語ができなくても生徒たちと近づくことができたこのような体験により、協力隊に参加する以前にも音楽授業で生徒たちに繰り返し伝えていたもう1つのことについても、より自信を持って伝えることができるようになった。『『伝える技術』よりも、『伝えたいという思い』が重要である」という信念だ。「こんなふうにメロディーを奏で、聞かせたい」という思いが強ければ、おのずとそのための方法を人は見つけ出していく。これを森さんは、「赤ん坊でもおなかが空けば、泣いてそれを伝える」といった例えを出しながら生徒たちに伝えているが、その際に頭に思い浮かべているのは、協力隊員としてベリーズに赴任したばかりの自分自身の姿にほかならない。

教員らしくない仕事

南丹高等学校は、「普通科」と「専門学科」の要素を組み合わせた「総合学科」と呼ばれる学科だけを置く学校だ。生徒の個性を生かした主体的な学習の重視や、自己の進路への自覚を深めさせる学習の重視などを特徴とする学科である。森さんは19年度から、「総合的な探究の時間」で総合学科の趣旨に沿った授業を実施する校務分掌を担っている。

そこで森さんがこれまでに実践してきた授業の1つは、「プラスチックゴミをゼロにする方法を考え、実践する」という課題に取り組むものだ。学校がある亀岡市はプラスチックゴミをなくすことを目指しており、市内にはペットボトルを減らすために浄水フィルター付きの水筒の普及に取り組む企業もある。そこで両者と協働し、実現した授業である。生徒たちが発案し、実践しようとしているのは、市内の店舗を回り、「給水スポット」を地図上に示すスマートフォンのアプリへの登録を勧めることなどだ。

そうした授業で生徒たちを指導する際に基盤となっているのは、「社会で何かを変えるためには、さまざまな要素が必要となる」という、自身の協力隊経験で得た学びである。協力隊時代、音楽授業の質を上げるためには、音楽の知識や技術を持っているだけでは足りず、同僚教員との関係づくりや、教材を導入するための予算の確保なども必要となった。「教壇に立つ」という仕事にはない複雑さを持つそうした取り組みの経験を踏まえながら、「プラスチックゴミ」の授業では生徒たちに、「あなたのアイデアを実現するためには、誰にアプローチしたら良いだろう？」「必要となるお金はどう調達するの？」といった問いかけをしている。

「平気で遅刻してくるような協力隊時代の同僚たちと付き合うなか、『教員はかくあるべき』という固定観念が取り払われました。だからこそ今、行政や企業など学外の人の所に飛び込んでいき、授業への協力を取り付けるような、『教員らしくない仕事』も臆せずできているのではないかと思います。今後も、協力隊で得たそんな『図々しさ』を生かしながら、学校を社会とつなぐ役割を果たしていければと考えています」

AFTER

AFTER

上：森さんと南丹高等学校の教え子たち。手にしているのは、「総合的な探究の時間」で普及に取り組んでいる浄水フィルター付きの水筒
下：「総合的な探究の時間」で異文化理解についての講義を行う森さん

JOCV

同僚教員（右端）と共に立ち上げた合唱部のメンバーたちが、国内の合唱コンクールに参加したときの様子

CASE 03

古岡 繭（ふるおか まゆ）さん
（ルワンダ・コミュニティ開発・2014年度1次隊）

1989年生まれ、兵庫県出身。立命館大学国際関係学部を卒業した後、神戸大学大学院国際協力研究科修士課程に進学し、ウガンダの元子ども兵の経済的自立について研究。2014年に修了し、同年7月に青年海外協力隊員としてルワンダに赴任。東部県ンゴマ郡の郡庁に配属され、協同組合の設立・運営の支援などに取り組む。16年7月に帰国。17年4月、国際協力事業に取り組むNPO法人テラ・ルネッサンスに就職。同年9月からブルンジに駐在。

BEFORE **大学院生**

AFTER **国際協力団体の駐在員**
（NPO 法人テラ・ルネッサンス）

アフリカに再赴任し経済的自立の支援に従事

大学院で国際協力について研究した後、新卒で協力隊に参加した古岡さん。任期終了後の仕事に選んだのは、協力隊時代と同じアフリカで貧困層住民などの経済的自立を支援することだ。

アフリカとの出合いは学生時代

「海外」を意識し始めたのは高校時代。「英語」と「世界史」が得意だったからだ。進学したのは立命館大学国際関係学部。国際的な仕事をするには修士号を取得しておくと有益だという両親の勧めもあり、卒業後は神戸大学大学院国際協力研究科に進んだ。修士論文のテーマにしたのは、2000年代まで20年あまりにわたって続いたウガンダの内戦で「子ども兵」とされた人たちの経済的自立だ。これを選んだきっかけは、古岡さんが現在所属するNPO法人テラ・ルネッサンス（以下、「テラ」）との出合いだった。

「テラ」は、カンボジアの内戦で残された地雷の撤去支援や、ウガンダの内戦で子ども兵とされた人の経済的自立の支援などに取り組む団体。古岡さんは大学3年生のときに「テラ」の創業者の講演を聴く機会があり、「元子ども兵の経済的自立」という課題に興味を抱く。その後、大学院への進学を決めたことから、勉強の機会になると考えて「テラ」のインターンとなり、大学院を修了するまで京都市内にある事務所に通った。大学院に入った年の夏休みには、「テラ」のインターンとしてウガンダの事業地に行き、支援対象だった元子ども兵へのインタビューを経験させてもらう機会があった。それにより「元子ども兵の経済的自立」という課題への興味がさらに強まったことから、修士論文のテーマとしたのだった。

研究では、「テラ」の支援を受けたウガンダの元子ども兵たちを調査対象とし、彼らの経済的な自立にはどのような支援が有効なのかを分析。職業訓練の機会を提供するだけでなく、「元加害者」として見られるストレスを緩和する心理社会的支援を合わせて行うことが必要だという結論を導いた。

大学院修了後の第一歩として選んだのは、協力隊への参加。「テラ」の職員には、代表者を含めて協力隊経験者が多く、インターンをするなかで彼らの体験を聞き、興味が募ったからだった。派遣されたのはルワンダの郡庁。農家や若者の収入向上を目的として、ビジネスに取り組む協同組合の設立や運営を支援することが主な活動だった。任期中、古岡さんの後押しによってレンガと石鹸の製造・販売を行う協同組合がそれぞれ1つずつ発足。いずれも職にあぶれていた若者たちによる組合だった。

任地の職業訓練校で「ビジネス」について学ぶワークショップを行う協力隊時代の古岡さん

プロジェクトマネージャーに

「任期終了後はうちでアフリカの事業に携わってくれないか」。「テラ」の代表者からそう声を掛けられたのは、協力隊の任期が残り半年ほどとなったころだった。アフリカにかかわり続けることができる点と公益性が高い点で、古岡さんにとって魅力的な仕事だった。そうして入職を決意。京都やウガンダの事務所での研修を経て、ブルンジの駐在員に着任したのは、協力隊の任期を終えて1年あまり経った17年9月だ。

当時「テラ」がブルンジで進めていたのは、18年3月までの3年間を実施期間とするプロジェクト。1993年から15年あまりにわたって続いた内戦で家族を失うなどした被害者や貧困層住民を対象に、経済的自立に向けた支援を行うものだ。養蜂や窯業などの職業訓練の提供や、その受講後に協同組合を設立してビジネスを開始するための後押しなどが、具体的な内容である。対象地域は、内戦の影響が特に大きかったキガンダ郡の1つの村。古岡さんはこのプロジェクトが終わるまでの約半年間、プロジェクトマネージャーだった「テラ」の代表者のサポートにあたった。18年4月には、対象地域をキガンダ郡全域に拡大する形でこのプロジェクトを引き継ぐ新たな3年間のプロジェクトがスタートし、古岡さんはそのマネージャーに着任。以来、同国で唯一の日本人駐在員として、現地スタッフたちと共に運営にあたってきた。

「誇り」や「生きがい」

協力隊経験は随所で現在の仕事につながっている。ブルンジで使われているキルンディ語は、古岡さんが協力隊時代に使っていたルワンダのキニアルワンダ語と非常に似ているため、難なく習得できた。また、協同組合の法制度も両国で似通っているため、ブルンジでの協同組合の設立支援に苦労はなかった。現在の仕事にとって特に重要な協力隊経験の財産だと感じているのは、「現場を知ることの大切さ」への理解だ。協力隊時代、支援対象の協同組合のもとに繰り返し足を運び、メンバーとのコミュニケーションを重ねたことで、組合の運営で一番の鬼門となっているのが「メンバー間の人間関係」であるという事情が見えてきた。そうした経験があるため、現在の仕事でも、支援対象者が職業訓練を欠席した場合にその理由を突き止めるなど、彼らの個別の事情を知るよう努めている。そうすることで、「家族が病気なので、どうしても日雇い労働をする必要が出てきた」といった事情が判明したときなどは、受講の継続に必要な支援をするなど、きめ細かな事業運営が可能となっている。

研究、協力隊活動、「テラ」での仕事の3つに一貫しているのは、「経済的な自立」にかかわるものであるという点だ。国際協力には「保健・衛生」などさまざまな分野があるが、「経済的な自立」の支援は特に関心が強いと古岡さんは話す。

「『テラ』のインターンとしてインタビューをしたウガンダの元少年兵が、『自分が稼いだお金で家族を食べさせることができるのがうれしい』と話していました。『自分で稼ぐ』ということは、誇りや生きがいにつながっていくのだろうと思います。だからこそ、それを支援することはやりがいも大きい。『テラ』は一貫して『経済的な自立』の支援を続けている団体ですので、今後もその事業で力になれればと考えています」

AFTER

AFTER

上：「テラ」の職業訓練で洋裁を学んだ後、テーラーとして自立した受講者（左手前）を訪ねる古岡さん（右）と「テラ」の現地スタッフ
下：「テラ」の職業訓練で養豚を学んだ受講者やその家族たちと

現場CloseUp

JICA海外協力隊員の活動＆生活をご紹介

地方の農山漁村から都市部まで、JICA海外協力隊員が赴く場所は千差万別です。ここでは、異なるタイプの場所で活動に取り組んだ協力隊経験者たちに、任地や活動、生活の様子を紹介してもらいます。

尾関康平（おぜきこうへい）さん

派遣国：カメルーン
隊　次：2017年度1次隊
職　種：コミュニティ開発

PROFILE●
1989年生まれ、愛知県出身。名古屋市立大学人文社会学部卒。公務員として4年半勤務した後、2017年6月、青年海外協力隊員としてカメルーンに赴任。19年6月に帰国。写真は、任地の住民と共に井戸の修理をしたときのもの。

Q. 参加のきっかけは？

大学を卒業した後、「海外で働いてみたい」と思いながら公務員として働いていました。ある日、その思いを上司に打ち明けたところ、彼も当時の私と同じくらいの歳で同じような思いを持ち、協力隊への参加も考えていたという話を聞きました。協力隊への参加を真剣に考えるようになったのはそのときからです。

Q. やりがいを感じた瞬間は？

私の活動に対して任地の人から「ありがとう」と声を掛けられたときや、手洗いの歌を教えた子どもたちが歌を覚え、披露してくれたときなどです。

アフリカ
Cameroon
カメルーン

任地

西部州ンデ県バンガンテ郡
バントゥム村

位置	首都から約240キロ
人口	約1000人
民族	約9割はキリスト教徒のバミレケ族、約1割はイスラム教徒のボロロ族
言語	フランス語、英語、メドゥンバ語など
産業	農業
気候	気温は20～30度と温暖で、雨期と乾期がある

尾関さんの任地・バントゥム村は、カメルーン西部の高地に位置する小さな村。標高は約1000メートルで、気候は温暖だが、雨期の朝晩は冷え込むこともある。首都からの距離はバスで4時間ほど。村を縦断する幹線道路以外は、舗装されていない赤土の道が縦横に走る。住民の主な収入源は、トウモロコシやカカオなどの農産物。

「任地では、戸外で遊んでいる子どもの姿をよく見かけ、雨期には、雨どいから落ちる雨水で水浴びをする子どもの姿も見られました。任地の子どもたちは私にとって癒しの存在でした」（尾関さん）

❶首都までつながる幹線道路の脇にある村の中心部。商店や学校があるため、一日中賑わっている
❷幹線道路から延びる大通り。赤土のため、雨期は水を含んでぬかるみ、乾期は砂埃が舞う
❸住民の多数を占めるバミレケ族の子どもたち
❹買い物の荷物を頭に載せて運ぶ女性。現地ではよく見かける光景の1つだ

活動

「水」に関する課題の解決に尽力

尾関さんの配属先は、バントゥム村の開発を目的とした事業を行う、カメルーン農業・農村開発省の地方出先機関。尾関さんの着任当時、村の課題の1つとなっていたのは「水」に関するものだ。水道は通っておらず、村に2基ある井戸も故障していたため、住民は衛生面で問題がある湧き水を飲料水に利用していた。そうしたなかで尾関さんは、井戸の修理、その管理を行う組合の設立・運営などを支援。そのほか、学校の巡回やラジオ番組への出演などによる衛生啓発や、乾燥に強い品種のコメの栽培普及などにも取り組んだ。

❶小学校で手洗い指導を行う尾関さん。小さなタンクを使う簡易手洗い器の設置も促した
❷新設された井戸管理組合のメンバーたちと
❸手洗いの大切さを伝える歌をつくり、歌詞を模造紙に書いて手洗い指導に利用した
❹乾燥に強いイネの品種「ネリカ」の栽培普及活動では、実践し始める農家も現れた

隣村のラジオ局の番組に週に1度、5～10分程度出演して、手洗いの仕方や日本の文化などを紹介した

活動の記録や語学の勉強に重宝していた、現地の子どもたちが使うノート

生活

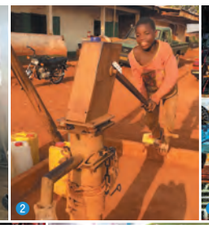
自身の生活も「水」で苦労

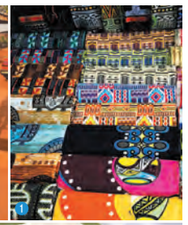
生活水は井戸で汲んだ水を、トイレの水にはタンクに貯めた雨水を使った。洗濯はたらいで手洗いだ。朝食はベニエ（小麦粉でつくるドーナツ）やバナナで手軽に済ませ、昼食は食堂の現地料理。夕食は自炊で、焼き魚のテイクアウトなども活用した。村内ではインターネットもつながり、通信量が1日1GBまでで月額約2000円のプランを利用。

1日のスケジュール

08:00	起床、朝食、洗濯
09:00	配属先で上司にその日の予定を報告
10:00	試験栽培しているネリカの畑で生育状況を確認
11:00	活動の準備・打ち合わせ（学校での授業のアポ取り、資料の作成など）
12:30	昼食
13:00	村の巡回（井戸管理組合の会議、学校での授業など）
16:00	帰宅、水汲み、近所の人との世間話
19:00	夕食、ネットサーフィン、語学の勉強など
22:00	就寝

立地	配属先まで徒歩3分
電気	あり（不安定）
水道	なし
トイレ	洋式（水洗ではない）
洗濯	手洗い
風呂	シャワー室はあるが、水道はなかったので、井戸水を沸かして使った
特長	部屋が広いこと
悩み	ネズミやゴキブリがよく出ること





❶カラフルで多様なプリント布を扱う専門店。現地の人たちと同様、買った布をテーラーに持ち込み、ズボンなどに仕立ててもらった
❷ハンドポンプ付きの井戸。「水を汲むために井戸に集まる住民たちと他愛もない話をする時間は、任地での至福の時でした」（尾関さん）
❸空手のたしなみがある尾関さんの家の警備員には、学校で開いた空手教室の講師を務めてもらった
❹尾関さんの好物だった「クスクスとオクラソース」とその付け合わせ。カメルーンのクスクスはキャッサバ（イモ）を練ってつくる料理
❺村の日用品店。卵や飲み物、トイレットペーパーなども揃っていた

尾関さんが朝食に食べていたベニエ。露店で1個10～20円で買うことができた

現場CloseUp

南米
Brazil
ブラジル

近藤（こんどう）ゆみさん

派遣国：ブラジル
隊　次：2018年度1次隊
職　種：日本語教育

PROFILE●
1991年生まれ、滋賀県出身。大学卒業後、民間企業に4年間、広報担当や秘書として勤務。2018年7月、日系社会青年ボランティア（現・日系社会青年海外協力隊員）としてブラジルに赴任（現職参加）。20年7月に任期を終え、復職。写真は配属先の生徒たちと。

Q. 参加のきっかけは？

学生時代にコロンビアに旅行した際、日本や日本語に興味がある人が多くいることに感動した一方、そうした人たちが日本や日本語に触れる機会が少ないことも知りました。その経験から、いつか南米で現地の人たちが日本をもっと身近に感じることができるような活動がしたいと思うようになりました。

Q. やりがいを感じた瞬間は？

私が大切にしていたのは、生徒や同僚教員の日本語能力が上達するだけでなく、彼らに自信を持ってもらうことでした。生徒が人前で日本語を話せるようになった姿や、同僚教員が新しいことに挑戦しようとする姿を見たときは、感無量になりました。

任地

サンパウロ州
ピンダモニャンガバ市

位置	首都から約160キロ
人口	約16万人
言語	ポルトガル語
産業	工業、酪農業
気候	一年を通して温暖な気候だが、夏期（11～3月）は暑く、平均気温は20～30度になる

近藤さんの任地・ピンダモニャンガバ市は、首都から車で約2時間の場所に位置する田舎町。「ピンダモニャンガバ」という長い地名を正しく言えるか、近藤さんは現地の人によく試された。この地名は先住民が付けたもので、彼らの言葉で「釣り針をつくる町」を意味する。市内にはパライバ川という大きな川が流れており、そこで釣りが盛んだったことを偲ばせる。

「任地には、日本語が上手な日系人の方も多く住んでいらっしゃいます。彼らがつくる日本食をごちそうになる機会も多く、家族のような感覚でお付き合いをさせていただきました」（近藤さん）

❶任地と他の地域との行き来に近藤さんがよく利用していた高速バス
❷市内の家並み
❸市内の観光名所の1つである美術館。植民地時代のコーヒー農園主の家を改装したもの
❹市のモニュメントの前に立つ近藤さん（左から3人目）と配属先の同僚たち

近藤さんの配属先は、ピンダモニャンガバ市の日系人団体「ピンダモニャンガバ日伯文化体育協会」が運営する日本語学校。日本語や日本文化に興味がある日系人やブラジル人の子どもから大人までの幅広い世代が日本語を学びに来る「塾」のような存在だ。生徒数の伸び悩みや現地教員の指導力向上が課題となっていたなか、日本語や日本文化の授業の実施、現地教員の育成などに取り組んだ。

「生徒たちと授業時間外に現地で流行っていることや日本のことを話したり、彼らの相談に乗ったりする時間は、幸せを感じられるひとときでした」（近藤さん）

ピンダモニャンガバ日伯文化体育協会の会館

❶東京五輪の応援ソング『パプリカ』のダンスを子どもたちに教えた授業
❷配属先で日本文化祭りを開いた同僚たちと近藤さん（左から4人目）
❸日本文化の授業で「茶道」の指導をする近藤さん
❹同じく日本文化の授業で「書道」の指導をする近藤さん

活動

日本語と日本文化の伝承を支援

立地	配属先まで徒歩10分
電気	あり
水道	あり
トイレ	水洗式
洗濯	洗濯機
風呂	シャワー（お湯も出る）
特長	高さのあるキッチン
悩み	窓に蚊よけの網戸がないため、熱帯夜でも開けられないこと

1日のスケジュール

07:30	起床・朝食
08:30	ポルトガル語の学習（家庭教師）
10:00	授業・教材準備
12:00	昼食
13:00	フィットネスジムのレッスン
15:00	配属先で授業準備
17:00	授業
21:00	帰宅、夕食、シャワー
22:00	友人と電話、テレビ鑑賞
24:00	就寝

ブラジル原産の植物「アサイー」をベースとしたデザート。フィットネスジムの帰りにジムの友人とこれを楽しむのが気分転換法だった

生活

交流が絶えない環境

食事は自炊か同僚との外食。同僚は日系人が多く、「日本食を作ったから食べにおいで」と誘ってもらうことが多かった。休日に家族や友人が集まって楽しむブラジル版バーベキュー「シュハスコ」も楽しみの1つ。活動にもどかしさを感じたときは、フィットネスジムで思い切り汗を流し、文化理解や語学力を高めた。

近藤さんが大好きだったブラジルの家庭料理「ストロガノフィ」。ロシア発祥の「ストロガノフ」に味付けなどのアレンジを加えたものだ

❶通っていたフィットネスジムで共にレッスンを受けていた友人たちと（左端が近藤さん）
❷近藤さんがよく利用していた市内の市場。野菜や果物もきわめて豊富だった
❸教材作成などのために近藤さんがよく利用していた、日系人が経営する文房具店
❹日系人がつくり、市内の商店で販売されている日本食の数々

JOCV BOOKS

協力隊経験者の著書

JICA海外協力隊経験者のなかには、派遣中の体験、あるいは協力隊経験を生かしたその後の人生について、本にまとめて発表する人もいる。それらは、協力隊への参加を検討する方々にとって貴重な情報源となるだろう。ここでは、2020年中に発行された協力隊経験者の著書をピックアップしてみた。

『ソロモン諸島でビブリオバトル
～ぼくが届けた本との出会い～』

著者：益井博史（ソロモン・青少年活動・2015年度3次隊）
発行：子どもの未来社、2020年5月
定価：1540円（税込）

自分が気に入った本の魅力を紹介し合い、「読みたいと思った」という参加者の票を誰が一番多く集めることができたかを競うイベント「ビブリオバトル」。日本でその普及に携わってきた本書の著者は、青年海外協力隊員として渡ったソロモンの小さな島でも、その普及に挑戦。するといつしかソロモン全土へ、さらには隣国へと広まっていった。本書は、そうした活動の様子を写真と共につぶさに記録した奮闘記だ。

ますい・ひろふみ●1988年生まれ、京都府出身。一般社団法人ビブリオバトル協会理事、ビブリオバトル普及委員会理事、立命館大学情報理工学部創発システム研究室客員研究員。京都市を中心にビブリオバトルの普及に携わった後、青年海外協力隊員としてソロモンに赴任し、ビブリオバトルの普及に取り組む。2016年にビブリオバトル普及委員会が主催するビブリオバトルの顕彰イベント「Bibliobattle of the Year」の大賞を受賞。

『くらして初めて知った（ど）ローカルごはん
～日本で作れる世界のレシピとお話～』

※

著者：青年海外協力隊大阪府OB・OG会
発行：青年海外協力隊大阪府OB・OG会、2020年11月
定価：550円（税込）　※Kindle版のみ

派遣された地の人々と共に暮らし、共に働くJICA海外協力隊員。文字通り「同じ釜の飯を食う」こともしばしばだ。そうした経験をしてきた著者たちが、それぞれの派遣国の料理のレシピを紹介するのが本書。掲載している料理は実に66カ国のものに及ぶ。現地の人々の料理の様子や食べ方などを紹介するコラムも添えられており、彼らに対する協力隊経験者たちの愛に溢れた無双のレシピ本となっている。

せいねんかいがいきょうりょくたい・おおさかふ・おーびーおーじーかい●各都道府県には、そこを出身地とするJICA海外協力隊経験者や、現在そこに住んでいるJICA海外協力隊経験者などによって構成される「OB・OG会」が組織され、力を合わせながらJICA海外協力隊の経験を生かした地域社会への貢献などに取り組んでいる。青年海外協力隊大阪府OB・OG会もその1つ。

『もう一つのソーシャルワーク実践
～障害分野・災害支援・国際開発のフロンティアから～』

著者：東田全央（スリランカ・ソーシャルワーカー・2012年度3次隊）
発行：大阪公立大学共同出版会、2020年9月
定価：880円（税込）

生活上の困難を抱える人々を支援するため、相談を受け、必要な支援制度につなげるなどする「ソーシャルワーク」。本書の著者は、その専門家である「ソーシャルワーカー」として、東日本大震災の被災者や青年海外協力隊員として赴いたスリランカの農村部の住民など、多様な人々への支援に携わってきた。本書は、そうした経験やそこから得たソーシャルワークに関する新たな知見をまとめたものだ。

ひがしだ・まさてる●1981年生まれ、兵庫県出身。青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科助教、社会福祉士、精神保健福祉士。岩手県立大学社会福祉学部福祉臨床学科卒。英・シェフィールド大学大学院で国際開発・公衆衛生学修士号、大阪大学大学院で博士号（人間科学）を取得。（公社）やどかりの里職員、（公社）日本国際民間協力会スタッフ、青年海外協力隊員、JICA長期専門家などを経て現職。

『国際機関への就職［改訂版］
～NGO、協力隊からJPOへ～』

著者：伊藤 博（パラグアイ・村落開発普及員・2004年度2次隊）
発行：創成社、2020年4月
定価：1760円（税込）

本書は、NGOや青年海外協力隊員、国際機関職員などさまざまな立場で国際協力の仕事に携わってきた著者自身の経験を紹介し、国際協力の分野で活躍するための「キャリアの築き方」にヒントを提供するものである。協力隊について詳述する第六章は、応募や選考、派遣前訓練、現地での活動など、協力隊参加者が歩むステップが俯瞰できる内容となっているため、協力隊を志す人には有益な一冊となっている。

いとう・ひろし●1975年生まれ、三重県出身。名古屋商科大学マネジメント研究科教授。専門は国際教育開発、環境政策、NPOマネージメント・マーケティング。米・コロンビア大学大学院で教育学修士号、米・カリフォルニア大学大学院で教育学博士号、仏・パリ第一大学大学院で経営学修士号、名古屋大学大学院で環境学博士号を取得。米国の教育サービス会社社員、青年海外協力隊員、UNICEFやUNESCOの職員などを経て現職。

『幸福の国で働いてみた
～ブータンで過ごした17年～』

著者：冨安裕一（ネパール・食用作物・稲作・1974年度2次隊後期）
発行：自費出版（発売元は熊日出版）、2020年6月
定価：1320円（税込）

本書の著者は、青年海外協力隊員としてネパールでダイコン栽培の普及などに取り組んだ後、その経験をベースとしながら、ネパールとその隣国ブータンで合わせて40年近くにわたってJICA専門家として果樹や野菜の栽培指導に携わってきた。本書は、17年間に及ぶブータン時代の経験の詳細を記録したもの。協力隊員やJICA専門家にとっては、活動や仕事の具体的なイメージを得ることができる貴重な書だ。

とみやす・ゆういち●1949生まれ、熊本県出身。熊本県農業講習所（現・県立農業大学校）卒。農業研修生として2年間、米国で農業を学んだ後、青年海外協力隊に参加。その後、農業技術を教えるJICA専門家としてネパールで20年間、ブータンで17年間、ミカンやナシなどの栽培方法の指導にあたる。

JICA海外協力隊応募者向けGUIDE
クロスロード

発　行　日：2021年2月1日
編集・発行：独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒100-0004　東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

『クロスロード』誌通常号（月刊）はJICA海外協力隊のウェブサイトからご覧いただけます。

クロスロード 2021年2月1日発行 編集・発行 独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

JICA海外協力隊に関するお問い合わせ先

■応募・選考に関するお問い合わせ

お問い合わせ内容	窓口名称	TEL	e-mail
応募	JICA海外協力隊募集事務局	TEL：042（404）5021	contact@jocv.info
応募者用マイページ・選考	JICA海外協力隊選考事務局	TEL：03（6632）9465	info@jica-saiyo.com
上記以外	ボランティア相談窓口 （協力隊相談ライン）	TEL：03（5226）9817	jocv_sodan@jica.go.jp

JICA海外協力隊
ウェブサイト▶▶

■JICA国内拠点連絡先

名　称	所轄地域	TEL・FAX	e-mail	所在地
JICA 北海道（札幌）	北海道（道央・道北・道南）	TEL：011（866）8421 FAX：011（866）8382	hkictpp@jica.go.jp	〒003-0026 北海道札幌市白石区本通16丁目南4-25
JICA 北海道（帯広）	北海道（道東）	TEL：0155（35）1210 FAX：0155（35）1250	jicaobic@jica.go.jp	〒080-2470 北海道帯広市西20条南6-1-2
JICA 東北	青森県・岩手県・宮城県・ 秋田県・山形県・福島県	TEL：022（223）4772 FAX：022（227）3090	jicathic-jv@jica.go.jp	〒980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町4-6-1 仙台第一生命タワービル20階
JICA 筑波	茨城県・栃木県	TEL：029（838）1117 FAX：029（838）1776	jicatbic@jica.go.jp	〒305-0074 茨城県つくば市高野台3-6
JICA 東京	群馬県・埼玉県・千葉県・ 東京都・新潟県・長野県	TEL：03（3485）7461 FAX：03（3485）7025	tictpp1@jica.go.jp	〒151-0066 東京都渋谷区西原2-49-5
JICA 横浜	神奈川県・山梨県	TEL：045（663）3253 FAX：045（663）3265	yictpp@jica.go.jp	〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港2-3-1
JICA 北陸	富山県・石川県・福井県	TEL：076（233）5931 FAX：076（233）5959	jicahric@jica.go.jp	〒920-0853 石川県金沢市本町1-5-2 リファーレ オフィス棟4階
JICA 中部	静岡県・岐阜県・愛知県・ 三重県	TEL：052（533）0220 FAX：052（564）3751	cbictpp@jica.go.jp	〒453-0872 愛知県名古屋市中村区平池町4-60-7
JICA 関西	滋賀県・京都府・大阪府・ 兵庫県・奈良県・和歌山県	TEL：078（261）0352 FAX：078（261）0357	jicaksic-jocv@jica.go.jp	〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
JICA 中国	鳥取県・島根県・岡山県・ 広島県・山口県	TEL：082（421）6305 FAX：082（420）8082	jicacic-jocv@jica.go.jp	〒739-0046 広島県東広島市鏡山3-3-1 ひろしま国際プラザ内
JICA 四国	徳島県・香川県・愛媛県・ 高知県	TEL：087（821）8825 FAX：087（822）8870	jicaskic@jica.go.jp	〒760-0028 香川県高松市鍛冶屋町3番地 香川三友ビル1階
JICA 九州	福岡県・佐賀県・長崎県・ 熊本県・大分県・宮崎県・ 鹿児島県	TEL：093（671）6311 FAX：093（671）0979	jicakic@jica.go.jp	〒805-8505 福岡県北九州市八幡東区平野2-2-1
JICA 沖縄	沖縄県	TEL：098（876）6000 FAX：098（876）6014	oictpp@jica.go.jp	〒901-2552 沖縄県浦添市字前田1143-1

■青年海外協力隊訓練所

名　称	TEL・FAX	e-mail	所在地
二本松青年海外協力隊訓練所	TEL：0243（24）3200 FAX：0243（24）3214	jicanjv-bk@jica.go.jp	〒964-8558 福島県二本松市永田字長坂4-2
駒ヶ根青年海外協力隊訓練所	TEL：0265（82）6151 FAX：0265（82）5336	jicakjv-jocv@jica.go.jp	〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂15

これまで青年海外協力隊の「隊旗」に活用されていたマークが、改めてJICAボランティア事業のシンボルマークに制定されました。これをモチーフにしたバッジ（写真）が、2018年度2次隊より派遣前訓練の終了時にJICA海外協力隊員へ配布されています。このバッジは、公の場や活動などで適宜着用されます。